

平成24年度
第23回 大好きいばらき作文コンクール
入賞作品

茨城県知事賞	(4名)
茨城県議会議長賞	(4名)
茨城県教育委員会教育長賞	(4名)
茨城新聞社長賞	(4名)
大好き いばらき 県民会議 理事長賞 (35名) 小学校低学年の部 小学校高学年の部 中学生の部 高等学校の部	

大好きなぼくのまち

筑西市立小栗小学校 二年 黒 沢 優 心

ぼくのすんでるまちは、とてもいなかで、田んぼや川や山などのしぜんが、いっぱいのことっているまちです。二十四時間あいているコンビニも、行けばなんでもそろそろ大きなスーパーもあります。それをふべんという人もいると思います。でも、ぼくのまちには、とかいにはない、きれいな空気がおいしい水、夜になると空いっぱいキラキラかがやくほしがあります。だから、このまちが大好きです。でも、ぼくがこのまちを大好きなのは、りゆうがあります。それは、このまちにすむ人たちが大好きなことです。元気にあいさつをすると、元気にあいさつをしてくれます。いつだれにあっても、ニコニコえがおで話かけてくれます。どこにいても、だれかが見まもってくれているような、あたたかいまちだと思います。テレビのニュースで色々なはんざいがおきたと、まい日のようなながれています。日本のぜんぶのまちがぼくのまちのようだと、はんざいもなくなるのになと思います。ぼくのまちのように、あかるくてあんしんしてすごせるまちなればいいなと思います。

ぼくの大好きなまちにも、しんぱいなことがあります。それは、おとしよりがおおいことです。ぼくのひいおばあちゃんも、同じまちにすんでいます。ひいおばあちゃん、耳が聞こえづらいし、足がよわって、つえがないとうまくあるけません。一人で、びょういんにも、どこかへ出かけることもできません。いつも、だれかにつれて行ってもらいます。きつと、おなじようにこまっているおとしよりがたくさんいると思います。ぼくの大好きなまちは、おとしよりがこまらない、すみやすいまちになって、ぼくとおなじように、このまちをずっと大好きでいてもらいたいと思います。そして、ぼくも、ずっとこのまちが大好きでいたらいいなと思います。

茨城の家・未来の家

下妻市立騰波ノ江小学校 五年 栗 野 達 也

ぼくは将来、家をつくる仕事をしたいと思っています。父は、建築の仕事をしています。家がだんだん出来てゆくのを見てみると自分もやってみたいなあとと思うからです。

父に聞きました。家は地元の木でつくったほうが長持ちするそうです。それは、地元の気候に合っているのは、地元で育った木を使った家だということです。外国で育った木は、日本の気候に合っていないので、家が長持ちしないそうです。だから、茨城で家をつくるなら、茨城の木を使って、家をつくりたいと考えています。

それから、ぼくの住む茨城には、まだ古い家がたくさん残っています。ぼく達は、古い家をバカにしがちですが、古

い家には昔の人の知えがあります。エアコンを使わなくても風が良く通るようにしてあったり、夏の日ざしをさえぎるために、屋根の出を長くしてあったりします。何でも新しい物だけが良いわけではないと思います。古い家にも学ぶ点がたくさんあると思います。ぼくは、古い家の良い所を取り入れた家をつくりたいと思っています。

また、日本らしさ、茨城らしさのある家をつくりたいと考えています。ぼくの住んでいる所を見回しても、家のデザインはバラバラです。テレビでヨーロッパの街を見ましたがデザインがまとまっていて、きれいだなあと思いました。だから、外国の人が見て、日本らしさがあり、他の県の人が見て、茨城らしさを感じられる家がならぶ街。みんなで考えながら、そんな家をつくれればいいなあと思っています。

次に、ぼくは未来の家についても考えてみました。現在、世界じゅうの森林は、年々少なくなっています。だから木を切らないで、生きたまま家の形にできたらいいなあと考えました。屋根は、嵐にも平気な固い葉でおおわれ、夏の暑さをさえぎってくれます。部屋は、木がはき出してくれるさん素で、いつも空気がきれいです。じゅ液や果実は、人間の食料として使えます。いつか科学が発達して生きた木を人が住みやすい形に変える技術ができればいいなあと考えています。その結果街は森のようになり、地球にもやさしいかん境ができると思います。ぼくは、そんな未来の家を考えてみました。

実り豊かな茨城の農業

常総市立水海道西中学校 一年 成なり 富とみ 友紀恵ゆきえ

三月十一日。忘れもしない東日本大震災。福島原発事故。私たちの食生活を大きく変えたといってもいい。それまで私たは自分たちが食べるものは、たくさんあって何も心配しないで口に入れることができた。しかし、原発事故以来、セシウムが含まれる野菜や土壌汚染など健康被害から身を守る事が大切だと思っている。その反面、せっかく作った安全な野菜や米が風評被害から消費者に買ってもらえない悲しい出来事もあった。

毎年、私の家は、ゴールデンウィークに祖父の家の田植えを手伝っている。母の兄弟やいとこもいっぱい手伝いにきて楽しみである。おじさんが機械で苗を植える。その後、みんなでさし苗をしたり、田んぼのすみに苗を植えたりする。私の役目は、用水路で箱を洗ったり、みんなのお茶の用意をすることである。お手伝いをしてると、近所のおじさんが、「えらいなあ。よくやっているな。」と声を掛けてくれる。近所の人とのコミュニケーションも楽しみの一つである。

今年はいつもと違って、祖父は入院していたし、祖母は首の病気で田植えはできなかった。私たち家族と親戚だけで行った。私は、ちよつとさびしい気持ちもあったが、祖父母のためにもがんばろうと思つて、今年はさし苗を一生懸命に手伝った。以前、祖母が教えてくれた通り、二、三本の苗を

取って根つこの方をもつて、泥の中に植えた。箱もいっぱい洗った。全部が終わったとき、ちょうどお昼になった。祖母は、家でおにぎりをたくさん作って待っていてくれた。梅干しが入っていておいしかった。

「ご苦労様。助かったよ。今年はできないかと思っていたんだけど、みんなで作ってもらってよかった。」

と、ねぎらいの言葉を掛けてくれた。手伝ってよかったなと思つた。

「年をとると、やりたくてもだんだんと体がいうことを利かなくなってくるんだよ。情けなくなるよ。」

祖母は、震える手をさすりながら言った。人は毎年、年をとる。農業をやりたいと思つても体はいうことを利かなくなる。祖母が畑や田んぼができなくなったら、お米や野菜はどうなるのだろう。ほとんど無農薬に近い栽培の仕方で作るトマトやきゅうり。モロヘイヤ、大根、ねぎ、じゃがいも。いつも分けてもらって新鮮な野菜が食べられる。ありがたいことだと思つた。

「また、手伝いにくるからね。」

私は帰り際、祖母に声を掛けた。そうだ。この実り豊かな茨城の農業を私たち、若い世代が受け継いでいけばいいんだ。今日のようにみんなが力を合わせて働けば、畑や田んぼも守っていくことができるであろう。たくさんの農作物をこの茨城の大地で育て、自然の恵みに感謝しながら、生きていきたいと思う。

これからこの大好きな茨城を大切にしていきたいと思つた。

未来の為に、語り継ぐ

県立茨城東高等学校 二年 塙はなわ 直なお 樹き

あの時ほど、恐怖に怯えた事はありません。突然、地面が揺れ出し、町の建物を壊し始めました。その揺れの中では、立つ事さえも困難で、まるで地球が崩壊していくかのような激しい揺れが続きました。また、その揺れは、巨大な津波を引き起こし、東北地方沿岸の町を中心に、壊滅的な被害をもたらしました。そして、原子力発電所も被害を受け、原発事故までも引き起こしました。

二〇一一年三月十一日、三陸沖を震源とする、マグニチュード九・〇の未曾有の巨大地震が、東日本を襲いました。特に被害が甚大だったのは、岩手・宮城・福島の子三県で、連日多くのメディアで報道されていきました。私自身も、報道番組等で被害の深刻さを目の当たりにしました。しかし、忘れられて欲しくないのは、私達の故郷である茨城も多くの被害を受けた一県であるという事です。確かに、他の三県と比べると、被害の差は著しく少ないですが、それでも、偕楽園や六角堂など、多くの歴史的建造物や家屋の倒壊などの被害が出ました。また、港の方では津波が襲来したり、放射線問題に伴う、風評被害を受けたりするなど、震災に伴い、多くの問題が発生しました。しかし、ニュースとして取り上げられるのは、多くが東北三県の情報で、茨城の震災関連のニュースは、ほとんどが県内でしか発信されませんでした。その時に私は、「なぜ、同じ被災した県なのに、報道される量に格差

が生じるのだろう。」と思いました。その思いは、最近まで変わらずにいましたが、ある出来事を境に、その思いが変化しました。

今年の八月二十六日に私は、那珂市にある茨城県民の森で、いばらき新鮮組主催の草刈りボランティアに参加しました。昨年は雨天のために実施されなかったのですが、今年は昨年出来なかった分も、真剣に取り組みました。その事業の一環で、ある講話を聞きました。その講話の内容は、昨年の東日本大震災についてでした。岩手県の陸前高田市に住む方の、震災当日の様子や現在の状況などを、映像と話で教えてくれました。その方は、津波で家を流されて、奥さんを亡くしました。さらに、お孫さんが行方不明のまま、震災から一年半が過ぎようとしている今も、見つからないそうです。私はその話や映像を見て、とても悲しくなりました。そして、「なぜ、報道される量に格差が生じるのか」という、今までの思いが、変化しました。今まで私は、メディアが伝えていた情報だけで判断していましたが、今回、同じ被災者の生の話を聞いて、メディアからは見る事の出来ない心の傷を見て、改めて被害の深刻さを痛感しました。

この講話を聞いて、私は考えた事があります。それは、この震災で学んだ事を次に活かせるように語り継ぐ事です。今回の講話は、実体験を基に話してくれたので、語り辛い事もあったと思います。それでも、私達のために語ってくれたのは、この悲劇を風化させてはいけないからです。人間は、いつかは亡くなります。このまま、経験を伝えずにいると、実際に地震が発生した時に、今回と同じ事を繰り返してしま

ます。そうならないためにも、今回の経験を次世代に伝える必要があります。日本は、他の国と比べると、地震の発生件数が多い、地震大国です。数多くの地震が発生しているがら、経験を活かす事が出来なかったのは、経験を語る事をやめてしまったからだと思います。だからこそ、今の世代から次の世代へと、語り継ぐ事が、この悲劇を風化させないために、必要不可欠な事になると、私は思います。

震災から、もうすぐ一年半が過ぎようとしています。町は、少しずつ活気を取り戻してきていると思います。しかし、放射線問題やがれきの処分問題など、一年半が過ぎようとしている今でも、多くの問題が残っています。私も、何か復興の為に、役に立ちたいと思っていますが、私一人の力では、出来る事は限られています。しかし、まずは募金活動や被災した県の生産した特産物を買うなど、私にも出来る身近な事から始める事が、復興への第一歩に繋がると思うので、多くの復興支援に率先して取り組みたいです。

災害がもたらすのは、必ずしも被害だけではありません。災害をきっかけに学ぶ事や、考え直す事もあります。学ぶ事は大事です。しかし、ただ学んだだけでは、意味がありません。学んだ事に意味が出てきます。この先、いづどんな災害が起るかは、予想は出来ないけれど、この震災での経験が糧になるのは確かです。私はこの先、多くの人に今回の震災の体験を語って、この出来事を風化させないようにしたいです。震災から学んだ事を語り継ぎ、災害に強い茨城を作る。茨城の未来のために、私は取り組んでいきたいです。

みらいへつなぐ「でんとう」

常陸大宮市立美和小学校 一年 大^{おお}金^{かね}雅^{まさ}弥^や

ぼくは、なつやすみのおわりのころ、おはやしのたいこをならいはじめました。そのとき、「でんとう」ということばをきいたので、

「でんとうって、なあに。」

と、おかあさんにたずねたら、

「むかしからつづいている、おまつりやおんがく、しきたりとかをいうのよ。」

と、おしえてくれました。

ぼくがならいはじめたおはやしのたいこは、がっこうのたいこがちがったかたちをしていて、はじめは、どんなことをするのかドキドキしていました。でも、やってみたらすぐたのしくて、むちゅうになつていました。

おしえてくれた先生は、

「ずっと、このおはやしがつたわるように、あきらめずならつてください。」

と、はなしてくれました。

たいこのれんしゅうは、はじめはタイヤをたたいて、うちかたをならい、さいごにすこしだけ、本ものたいこをたたかせてもらいました。ふえやかねとあわせると、にぎやか

で、本とうのおまつりのような、たのしいきもちになりました。

「みらいへつなぐ、というのほ、おしえてくれる先生からぼくへ、ぼくからだれかにおしえていくことだよ。」

と、おかあさんがいいました。

ぼくが、だれかにおしえられるようになれるかわからないけれど、これかられんしゅうをつづけ、ずっとずっとこのおはやしをみらいへつなげていけたらいいとおもいます。

ぼくのすんでいるところは、むかし「りゅうごうそん」といい、「みわ村」になり、いまは、「ひたちおおみやし」と、なまえがかわりました。ぼくがおとなになったとき、まちなままえはかわってしまうかもしれないけれど、おはやしのでんとうは、そのままつづいていけるように、がんばりたいです。

将来の夢

小美玉市立竹原小学校 六年 糸^{いと}賀^が真^ま由^ゆ

私の夢は、医師になることです。私の妹はぜん息で、小さい頃から病院にかかっていました。その時に、あわてないで冷静に対応している先生を見て、私も将来あんな先生になりたいと憧れたからです。でも、現実はかなり大変な仕事ですよです。

今、日本では「医師不足」という問題が新聞やテレビなどでも数多く取り上げられ、大きな問題となっています。特

に、茨城県は人口十万人あたりの医師の人数が少なく、全国でも下位の方です。その中でも人数が少ない科は、小児科と産婦人科のようです。私はこのことを知ってとてもおどろきました。近くに産婦人科の先生がいなかったらよけいに産む人も少なくなってしまうし、せっかく産んでも、小児科の先生が近くにいなかったら病気になるのもすぐに診てもらえないので、少子化をくい止めようとしても、悪循環になってしまいます。

私の住んでいる地域には、何軒か小児科の病院がありません。それでも、風邪が流行る時期にはとても混んでしまいます。みんな具合が悪くて来ているのに、そんなに待ち時間が長くては、病気が悪化してしまいそうです。私も妹の付き添いで混んでいる病院に行くことがあるのですが、苦しそうにしているのを見ると、いつもはけんかばかりしている妹でも、さすがにかわいそうになってきます。

こんな時もありました。放課後に病院に行ったら、「小児科の診療は定員に達してしまっただけで締め切りました」と入り口に表示されていたのです。まだ診療時間内だったのでどういうことなのか聞いてみると、一人の先生が一日に診られる人数が決まっていたようです。確かに、もしも一日の診療人数が決まっていなかったら、先生も疲労で倒れてしまいます。でも、具合が悪い人は診てもらいたいと思うので、やっぱり小児科医の人数を増やさないといけないと思いました。

私のまわりには医師になりたい人（特に小児科医）はいないし、自分も将来本当になれるかわかりません。本人的には、医学部に入学するのに一番大事な理数系が苦手だし、来

年中学校に入ったら、英語の授業も始まります。医師が倒れてしまっただけじゃないので、体力もつけなければいけません。でも、後ろ向きに考えずに、まずは目の前のことをコツコツと地道に努力していきたいです。そして、自分の夢である小児科医になって、茨城県の小児医療に少しでも役立てるようになりたいです。

茨城に住む幸せ

つくば市立並木中学校 二年 みなみ南

たか郁 あき慧

「これ食べよ。」

そう言っただけで飯田さんはひよいと大きなスイカをもってきてくれる。受け取るとずっしり重い。暑い夏には飯田さんのスイカをガブッと食べるのが最高だ。飯田さんは五月の連休明けから、地面を這いだしたスイカの苗を一本一本丁寧に世話をしている。だから、美味しいスイカになるのだと思う。

私の住む地区は、古くからの大きな農家が軒を連ね、一面田畑に囲まれている。私はここに、四歳の時に引っ越してきた。今年の夏も、私の家のすぐ南側の畑ではスイカとトウモロコシがグングン育っている。その畑で毎日草を取り水をやり働いているのが近所の飯田さんである。飯田さんは野菜作りの達人で、地区内のあちらこちらに畑を持っていて、四季折々様々な野菜を育てている。ちょうど今の時期は、トマト・ナス・キュウリ・スイカ・トウモロコシなどが最盛期を迎えている。

夏の間、飯田さんの朝は早い。朝六時半には一通りの収穫を済ませ「おはよう。」と言って訪ねてきてくれる。店にはキズがなく形の整ったものしか並べられないのだと言って、少し形の歪んだトマトや曲がったキュウリなど、カゴいっぱい朝採り野菜を届けてくださるのである。

キュウリは、近くのスーパーでも買って食べたことがある。しかし、一度飯田さんのキュウリをいただいてしまうと、スーパーで買ったキュウリはスカスカしていて味もいまひとつ。やはりジューシーで味が濃く色も鮮やかな飯田さんのキュウリが食べたい、と思ってしまう。採れたてであることもあり、とにかく美味しい。トマトも同じだ。私の家では「飯田さんのトマト」と呼んでいる。どこのトマトよりも美味しい。自然の恵みと飯田さんに感謝しよう、と家族でよく話している。

もうひとつ、私が茨城にいて誇りに思うことがお米である。茨城のお米が食べられる幸せを教えてくださいましたのは祖母であった。

私の祖母は都会のだ真ん中、大阪市のにぎやかな所に住んでいる。お米は、父が近所の農産物直売所で買って送っている。祖母は荷物が届く度に電話をくれ、この「お米の宅急便」は、離れて暮らす祖母と私たち家族にとっての大切なコミュニケーションの一つになっている。

さて、その電話の中で祖母はいつも「お米がほんまに美味しいなあ。」と言っている。七年ほど前に祖父が亡くなり、祖母は現在独りで暮らしている。祖母の家には毎日のように近所の「おばちゃん仲間」が集まるのだそうだ。そして食事に

なると、必ずおにぎりをごちそうにするという。初めは、せっかく集まるのにおにぎりだけで良いのかと思っていたけれど、皆が「南さんのところに来るといつもご飯が美味しい。おにぎりで十分!」といって食べてくれるのだと、うれしそうに話してくれる。今ではそんな「おにぎりパーティ」はすっかり定着したらしい。私にとっては当たり前前の味、近所で手に入るいつもの味は、実はとてもぜいたくな品だったのだ。祖母が喜ぶのを知ってから、普段のお米をとんでもありがたく思うようになった。そしてまた、ほかの野菜についても同じように思うようになった。茨城県に住んでいてよかった、と一番強く感じる瞬間が、ごはんを「食べている時」だ。

しかしながら、ここ二〜三年、家の周りの田畑が変わってきている。梨畑がいつの間になくなってしまっていることがあるのだ。おそらく後継者がいないのだろう。これまでに築き上げられた茨城のすばらしい農業がなんとか続き、美味しい野菜、お米、果物の栽培が維持されてほしいと心から願う。

もうすぐ稲刈りのシーズンだ。自然の恵みに感謝しつつ、今年も美味しいお米がいただけるのを、私も、遠く大阪の祖母とその仲間も心待ちにしている。バンザイ! 茨城の野菜! お米! 農業!

茨城の魅力を発信

県立水海道第一高等学校 二年 田中彩理たなか しほり

「常陸の国の司が申し上げます。古えの翁たちの伝え語り継いできた古き物語を。」この文から始まる、奈良時代に書かれた常陸国風土記には、さらにこのようなことが書いてあります。「常陸の国は、国広く、山も遙かに、田畑は肥え、広野の拓けた良き国であります。」このことは今の茨城にも当てはまることです。昔から変わることのない自然に加えて、今ではたくさんのお観光名所があります。徳川齊昭が造り、日本三名園の一つである偕楽園をはじめ、袋田の滝、霞ヶ浦、筑波山、筑波研究学園都市など、楽しめる場所が多くあるはずですよ。しかし、茨城は全国の魅力度ランキングで近年最下位を取ったりもしているようです。なぜでしょうか。

それは、茨城の魅力を知っている人が全国的に少ないからでしょう。きつと、茨城のことを知らない人に魅力を話せば理解してくれると思います。だからといって一人一人に茨城の話をするのは非現実的なので、県民なら誰もが協力できる、茨城の魅力を全国にアピールする方法を考えてみました。

まず一つ目はつくばちびっこ博士。これはつくば市が主催しているもので、期間中につくば市内の研究所をめぐるスタンプラリーをするというものです。指定見学施設はおよそ四十か所ほどあり、市内にこんなたくさんのお研究所があるのは珍しいと思います。この行事ではスタンプ台紙となるパ

スポイトが必要です。市内の小中学生なら簡単に手に入りますが、市外の人からもらうには、わかりづらい部分があります。私のピアノの先生が前に「福島にいる親戚が今度遊びに来るからちびっこ博士に参加したいのだけれど、パスポートをどこでもらうのかわからなくて。」と言っていました。だから、庁舎や駅だけでなく各研究所にも少し置いておいた方がいいと思います。さらに、この行事を県内全域、また近県にもっと宣伝するべきです。ポスターはもちろんですが、県内の人が知って、それを他県の親戚や友人に伝えるといったこととなら、私たちにもできるはずですよ。

二つ目は、茨城県や市町村をもっとアピールすることです。と言ってもさまざまな方法がありますが、私が見つけたのは高速道路です。常磐道に乗って茨城県に入るとき、「ようこそ守谷市へ」という大きな看板があります。このように、高速道路付近でアピールをすれば、茨城に初めて来た人でも、「こんな地名があつて、ここにはこんな建物があるんだ。」といったことを考えてくれると思います。これをきつかけに、「〇市は家からそんなに遠くはなかったな。今度行ってみよう。」という考えにつながるはずですよ。

三つ目は、高速道路にあるサービスエリア。そこに行けば必ずご当地みやげを見ることができます。栃木といたら「とちおとめ」や最近人気の「レモン牛乳」。茨城は「納豆」ご当地キャラクターといっても「イバライガー」。正直、他県に比べると少し微妙な所があると思います。茨城は農業もさかんなのだから、「常陸牛」のように農産物に品種改良を加えて茨城の新ブランドを作ってみたり、熊本県で最近人気のキャラク

ター「くまモン」のように男女・世代を超えても人気が出るようなキャラクターを考えるといいと思います。それを県庁で働くみなさんだけで考案するのは難しいので、子どもたちから、デザインを募集したりアンケートを取ってみたりして決めれば、県民に人気のキャラクターになると思います。そうすることで、茨城の魅力をもっと多くの人に知ってもらえるようになるし、茨城のおみやげを求めて観光客も増えるでしょう。そしてそこからお金が入り、さらに財政が安定して、県民は今よりさらに暮らしやすくなるかもしれません。

このようなことから、茨城をもっと知ってもらえれば、私たちもたくさんいいことがあるのではないかと私は考えました。茨城の楽しさや魅力を知っている私たちにとってそれを知られていないために魅力度ランキングで勝手に低い順位をつけられるのは悔しいことです。

常陸国風土記に「海山の幸にも恵まれ、人々は安らぎ、家々は満ち足りている」情景。こんな温かみのある魅力いっぱい茨城を、全国に、世界に伝えていきたいものです。



大すきな私の町

大子町立だいいご小学校 三年 高橋 洸太

私のすんでいる大子町は、みどりの山と山とにかこまれていて、谷間には、くじ川が流れるしぜんゆたかな町です。男体山、ふくろ田の滝、あゆのやな場と、かん光客がたくさんおとずれます。

私の家は、家族でキャンプ場のしごとをしています。来てくれるお客さんは、川遊びをしたり、バーベキューをしたりして楽しんでくれます。お客さんは、「川の水がきれいだね。」「しぜんがいっぱいいいね。」と言ってくれます。私は自分のすんでいる町がほめられてとってもうれしい気持ちになりました。

私は小さいころ、大子町があまりすきではありませんでした。なぜなら私の好きなショッピングセンターや遊園地がなかったからです。なにもなくてつまらない町だと思っていました。でも大きくなってキャンプ場のしごとを手つだうようになり、遠くから来てくれるお客さんから大子町のいいところをたくさん教えてもらいました。そして、あらためて大子町のよさが分かるようになりました。

いつまでもこの美しいしぜんがのこるといいなと思います。

今の私に出来る事は、川にゴミをすてないようにしたり、ゴミひろいをする事です。

大きくなったら、たくさんの人に大子町を知ってもらおうしごとをしていきたいと思えます。そのためにたくさんべん強して地いきのやくに立つ人になりたいと思いました。

私の住む茨城

日立市立大沼小学校 六年 大城 優奈

私は去年の夏休み、宮城県と福島県へ行って来ました。少しでも困っている人のために役立ちたかったのと、自分の目で被災地の様子を確かめるために行ってきました。

私が茨城から来たと言うと、

「茨城も大変なのに、ありがとう。」

と言ってくれました。人と人のつながりや、優しさを感じた夏でした。

そして今年の夏、私は茨城のいろいろなところで夏をすごしました。河原子の海でたくさん泳いで、川でバーベキューをして、ショッピングモールで買い物をして、花火大会もたくさん行きました。

特に心に残っているのが、大子の花火大会で見た、とうろう流しです。暗くなった川にぼんやりと明るいとうろうが、たくさん流れていくのが、とてもきれいでした。たくさんのおとうろうに、いろんな人の思いがつまっているんだと聞いて、少しせつなくなりました。今までの夏休みの中で、こん

なに茨城にいていろんな体験をしたのは初めてでした。

そんな日々をすごして、私は、やっぱり茨城っていい所だなど改めて思いました。自然に恵まれていて、食べ物もおいしくて、人がとても優しい。私が生まれて十三年ですが、生まれてからずっと、あたり前のように思っていたものが実は、そうじゃなかったんだと感じました。海も泳げる場所が減ってしまい砂浜がなくなってしまうました。まだ震災から立ち直っていない場所もあるけれど、どこに行ってもみんな笑顔でした。たくさんの人が一生けんめい笑顔でがんばっている姿を見て私も元気をもらいました。

休みの間、たくさん他県の車を見かけました。海にも、おみやげ屋さんにも、たくさんの人がいました。それを見て、私はすぐうれしくなりました。たくさんの人に、茨城はがんばっているよ、元気だよって伝えればいいなと思います。

私のえがく茨城の未来は、他県の人や、外国の人がたくさん来てくれて、笑顔で茨城を楽しんでくれる、また来たいて思ってもらえる、そんなすてきな場所であってほしいと思います。様々なテーマパークを作ったり、古いものを変えたりするのも大切ですが、全て変えるのではなく変わってほしい所は、そのまま大切にして続けてほしいです。私は今の自然がたくさんある、人の笑顔があふれている、そんな茨城が大好きです。

その自然を未来につなげるためには、今茨城に住んでいる私たち一人一人の、守ろうとする気持ちが大切だと思います。

その気持ちがあれば、海や山にゴミを捨てたりしないと思

います。きれいな町に住んでいると、人は笑顔になれるし、笑顔でいると、優しい気持ちになれると思います。未来の茨城は、どこに行っても人の笑顔と優しさに出あえる場所になっていると信じています。

私が未来をつくる

水戸市立石川中学校 二年 桂^{かつら} 木^ぎ 真^ま 希^き

私の将来の夢は医師になることです。以前は、「女医さん」ってカッコいいなと思っただけでした。でも、私も医師になってたくさんの人々の役に立ちたいと思うようになりました。きっかけは、昨年の東日本大震災でした。この自然災害のせいでたくさんの人々が命を落としました。そして、津波や停電のため、医療機関は麻痺しました。でも、医師の方々はそんな悪条件の中でもあきらめずに必死に手当てをしていてすごいと思ったからです。その後も避難生活をしている方々のもとへ、医師がボランティアで被災地に赴き、優しく患者さんを診療している姿をテレビや新聞の報道で知り、その使命感に頭が下がると同時に感動を覚えました。私はその時、小学六年生だったので、勉強用具や大切に使用していたランドセルを寄付することぐらいしかできませんでした。

中学生となった今、東日本大震災の時に活躍していた医師のように、患者さんのことを一番に考えられる医師になりたいと思うようになりました。私の理想の医師は優しく患者目

線で接することが出来る人です。いつも、病院へ行くと笑顔
であいさつしてくれる、笑顔で診療してくれる医師の方がす
ごく接しやすく、何でも相談できると思ったからです。そ
れに、患者目線という意味では、むやみに専門用語を使っ
りせずに、誰にでも理解できる分かりやすい言葉で話してあ
げられるような人になりたいと思います。そして、誰よりも
腕のいい医師になって患者から信頼されたいです。

私は、この夢を叶えるために、今からがんばっていいこうと
している事があります。それは、知力・体力・集中力・コミュ
ニケーション力を高めることです。知力は、医療の知識を身
につけるために必要です。そのために今やっている勉強を
しっかり学び、将来、生かせるようにしたいです。集中力を
欠き、手術や治療でのミスは決して許されないので大切に
す。体力は、一日中働くためには欠かせません。だから、今
は一生懸命、部活動に参加して、たくさん汗を流してきち
んと体力をつけたいです。それに、体力がないとすぐに体調
をくずしてしまうので、自己管理も徹底していききたいです。
コミュニケーション力は患者さんと接するの一番大事なこ
とです。でも、私は少し人見知りなところがあるので、今の
うちからたくさんの人と出会い、緊張せずにしっかり目を見
て話せるようになりたいです。

そして、私が将来医師になったら、茨城県民の寿命を九十
歳まで延ばせるよう、この茨城に合った新たな病気の予防法
や治療法を見つけ出してみたいと思います。

一人前の医師になって一人でも多くの人を助け、みんなを
笑顔にしてあげられたらいいなと思います。

茨城で出来ること

県立水戸第三高等学校 一年 國府田 未 来

東日本大震災を経験し、私には何が出来るのだろうか、とい
う将来への疑問が浮かびました。震災が起こったあの日、学
校でも地域でも、大人は子供を優先的に守っていて、私達の
地域の子供はほとんど傷もなく避難出来ました。

私は、もし同じことが起こった時、私達を守ってくれた大
人のようになれるだろうか、高校に入学してからもずっと
考えていました。震災が起こらなかつたらきっと考えなかつ
たことだけれど、今を生きていく為には必要なことだろうと
も思うのです。

私の将来の夢は、音楽教師です。生徒に音楽がどんなに素
晴らしいものであるかを伝えたい、というその夢は昔から変
わりません。しかし、音楽を教えると共に、震災で知った茨
城県民の団結力、心の強さを教えてあげたいとも思っていま
す。そのように思った理由には、水を汲みに行った中学校で
の出来事が関係していました

水道やお風呂に使う水が無く、自分の通う中学校へ水を分
けてもらいに行くと、とても長い行列が出来ており、皆バケ
ツなどを持って寒い中並んでいました。私の父はその時出張
先の東京から電車の都合で帰って来ることが出来ず、私は母
と一緒に大きめのペットボトルを数本持って並びました。

少し並んだ後、前の方で汲んだ水をこぼしてしまった人が
いました。すると、その人の周りに後ろで並んでいた人達が

集まり、「大丈夫？」などと声をかけ、こぼれた分の水を汲み直してあげたり、「今は皆でがんばりましょうね。」と笑ってはげました合ったのです。その光景を見た時、初めて地域の団結力というものを知ったような気がしました。

いつか私も、率先して子供を守り、いろんな人と協力し合える、心の強い人になりたいと思いました。そして、私達の後を担う世代の子供達に、そう思ってもらえるような大人にもなりたいと思いました。

茨城の大学に入って、茨城で仕事をして、茨城の人達が教えてくれたことを伝えていくことが、今の私の目標です。

以前、私は人付き合いが苦手で、人と協力し合う、という行為そのものを避けていました。今でこそ、人と関わるのが得意になりましたが、人に話しかけることもまともに出来なかった以前の私には、小さな助け合いすら難しいことでした。

今、人との関わりに大切な意味を見つけることが出来て、茨城に住んでいて良かった、と思いました。以前のようになを閉ざしては、見えないこともあるのだと知りました。

音楽教師を目指したきっかけも、人と向きあうことに恐れを抱いては何も出来ない、と気付いたからでした。今になっても思うのですが、後から気付くことがたった十六年間生きてきた中にも沢山あって、それでも気付かないよりずっといいことだと、この作文を書き進めている間にふと思い返しました。

教師として社会に出て、子供達に正しいことを教える側に立った時、私が正しさを見極めるだけの人間になれているの

かは分かりません。教師の道を行かずに、他の道を見つけているかもしれない。しかし、心の強い人間になりたいと望んだ気持ちを忘れず、今を大切にしながら、努力を重ねていきたいです。

「人という字は、人と人が支え合って出来ている」という言葉がありますが、震災が起こった後の日本は、まさにこのように支え合っていたのではないか、と思います。

私のいない世界を担っていく、今からずっと後の時代を生きる茨城の子供達にも、私の周りにいた優しい人達のような心を知ってもらいたいです。今の茨城をとびきり豊かにして、協力し合うことの大切さを教え、たとえ困難に陥っても共に助け合う世の中になったら、どんなに素敵でしょう。私は、そんな風に人々が生きていけるように努力します。

この作文に取り組んで、自分に出来ることは何なのかを改めて確認することが出来ました。いつか茨城の役に立てるように、人とのきずなを大切に、毎日を生きようと思えます。今も昔も、茨城が大好きです。

いばらきの野さいを一ばんに

結城市立城南小学校 二年 中^{なか}田^た青^{あお}依^い

「いばらきは日本で二ばんめにやさしいを作っているところなんだよ。」

と、いつもお父さんが言っています。

ぼくの家はせんぎょうの家です。お父さんを中心に家ぞく四人でレタス、とうもろこし、長ねぎ、白さいを一年とおして作っています。休みの日は、ぼくも時どき野さいのはこづめやはこづめした野さいをトラックのにだいにつむお手伝いをします。ぼくがお手伝いをするときみんながとてもたすかるよ、とよるこんでくれます。ぼくが家の人たちを見ていて思うのは、朝早くから日がくれるまで長い時間しごとをして大へんだなということです。お天気もかんけいするので、お休みがきゆうになくなってしまうこともあつてがっかりする時もあります。でも、お父さんは、

「野さいも自分の子どもとおなじようにかわいいから、ほうっておくことができななんだよ。パパは自分の作る野さいが、ゆうきで一ばんいい野さいにしたいからいつもがんばっているんだよ。」

とよく言います。ぼくたちとおなじ、野さいもお父さんにとって大切な子どもならしかたがないのかなと思います。自

しんをもつていつも話してくれるお父さんはかっこいいなと思います。

ぼくの家野さいは、本当にあまくておいしいです。どの野さいもピカピカひかっています。お父さんみたいに、自分の野さいを一ばんおいしいものにしようとかんばって作っている人がいばらきけんにはたくさんいるのだと思います。だから、いばらきけんはのうぎょうが日本で二ばんになっているのだと思います。でも、やっぱり一ばんになつてほしいので、いばらきけんが一ばんのやさしいのけんになれるようにぼくもたくさんお手伝いをしたいと思います。

「将来のゆめ」

つくば市立松代小学校 四年 貫^{ぬき}田^た麻^ま友^ゆ

将来私は医者になることがゆめです。私が小さなころからずっと思っていたことです。

私の父は、私が一才になるとすぐに「ガン」という病気になりました。とてもむずかしい病気で、治りようしてもどんなに進んでいく病気だと母から聞きました。

私はまだ一才だったのでよく覚えてません。担当の先生は、父のために一生けん命治りようをしたり、何度か手じゆつをしました。しかしガンはどんどん広がり、治りませんでした。私は大きくなってそれを聞いた時にガンはとてもこわい病気だなあと思いました。

また、先生は病気の治りようだけではなく、小さかった私

と遊んでくれたり、元氣のない母をばげましてくれました。
父のたん生日には先生やたくさんのかんごしさんたちが父のベッドのまわりに集まり、たん生日の歌を歌ってくれたりしました。

私はそのことを母から聞いて、医者には、病気を治すだけではないんだと思いました。

父が亡くなったのは、私が二才になってすぐです。その時死という言葉はよく分からなかったけれど、五才になってようやく意味が分かりました。この時とても悲しかったです。

一生けん命治りようしてもなかなか治らない病気がある。それならば、私が医者になって父のようなむずかしい病気の人たちを助けてあげたいと思い始めました。そんなけいされる医者になりたいです。

医者になるためにはまずたくさん勉強しなければいけません。これからもっとむずかしいことを覚えなければいけないけれど、ゆめをかなえるためあきらめません。

そして、海外のぎじゅつを学ぶために英語などの外国語を学びたいと思います。今よりも英語を話せるようになって、日本だけではなく、海外で苦しんでいる人の役に立ちたいと考えています。

また、かんじゃさんの心もいやしてあげられる医者もめざします。思いやりを持ち、みんなから好かれるような人になることです。

「将来、医者になりたい」ということをあきらめないで努力していくことが今の私にできることだと思っています。

みんなが元氣になってたくさん笑顔を見たいです。そし

て病氣の人が少なくなるように私も医者の一人士としてがんばりたいです。

未来へつなぎたい、茨城の自然

小美玉市立小川南中学校 一年 内山龍人

僕は、小さい頃から生き物が大好きです。

僕の住んでいるところは、霞ヶ浦の近くで、小川も多く、広い平野には、田んぼや畑が広がっています。その周りには、防風林や雑木林もたくさんあります。だから、多様な生き物たちがたくさんいます。川や池や田んぼの周辺では、魚はもちろん水生昆虫たちもたくさんいるし、水辺に集まるたぐさんの水鳥たちも見られます。森林に入ればカブトムシやクワガタなど、子供に大人気の虫たちにも、たくさん出会えます。虫が多ければそれを食べるトカゲやヤモリ、鳥たちも集まってくるし、カエルが多いのでヘビもいるし、そしてこれらの小動物を必要とするタカなども生息しています。

僕は、そんな地元で、小さい頃から、いつも夢中で虫とりや魚とりなどをして遊んでいました。僕にとっては、ごくあたり前の環境だったし、ごくあたり前の毎日でした。

でも、成長するにつれ、そんな豊かな自然が、けしてあたり前のものではないというか、むしろとても貴重なものだと、わかるようになってきました。

僕の母は東京出身なので、たまに母の実家に遊びに行く時など、車で都心の高速道路を通ったりするのですが、僕は

つも、都心の空気にたえられなくて、窓をしめてしまいます。母の実家は郊外のほうなのですが、それでも田んぼや畑などはほとんどない様ですし、公園の緑地も、僕にはとても人工的に見えます。東京にも、虫や魚はいるのですが、数も種類も、ずいぶん少ないように感じます。

東京は便利で、いいところもいっぱいあると思いますが、僕は東京に行くたびに、逆に、僕はやっぱり茨城が好きだなあ……と実感してしまいます。茨城の自然が、大切に貴重なものだと、よくわかるようになりました。

僕は、茨城で育ったから、こんなに生き物好きになったのかもしれない。生き物は、観察していて面白いことや不思議に思うことがたくさんあって、興味がつきなくて、とても楽しいです。

一昨年から、僕は、地元の生物調査会『小美玉生物の会』にも入会させていただいて、大人の皆さんと一緒に調査活動に参加するようになりました。会での活動を始めてみると、定例調査会のたびに貴重な新発見があったりして、ますます、僕にとってはあたりまえだった地元の自然が、いかに貴重なのかを実感するようになりました。会長や、年配の会員さんたちにも、「地元の里山環境の保護保全は、この会の大きな目的のひとつだから、あなたのような若い人たちに、ぜひ引き継いでいってほしい。」とよくお話しをいただきます。

茨城には、多様な生き物を育む里山の環境が、豊かに残っています。森林や水場があり、豊かな自然の中に人々の生活がある、このような環境を、「里山」と呼ぶそうです。日本の、古くからの、とても日本らしい環境なのだそうです。い

つか、僕にも、子供ができるかもしれないし、孫もできるかもしれない。僕の父や祖父が、僕を虫とりに連れていってくれたり、魚とりを教えてくれたりしたように、僕も生き物の楽しさを、伝えていけたらいいなと思います。そのような未来のためにも、僕は、せっかく身近に残っているこのような里山の環境を、大切に未来へ守っていきたいと思っています。

二つの顔を持つ茨城

県立水海道第一高等学校 一年 國府田 千 拓

茨城県には二つの顔がある。山や湖、たくさんの緑にかこまれ、耳を澄ませば聞こえてくる鳥のさえずり。しかし、すこし南に走れば、そこには夢と希望に満ちた科学の世界が広がっている。

霞ヶ浦に小貝川、関東平野などたくさん自然がある茨城県。その中でも私は筑波山が好きである。筑波山はその美しい姿から、「西の富士、東の筑波」と称されている。かつて徳川家康は「鬼門の護り」として筑波山をあがめ、中禅寺（現在の筑波山神社）を祈願所に定めた。その後三代將軍徳川家光によって「つくば道」がつくられた。現存でもつくば道には歴史を感じる建造物などが残っている。そんな筑波山のふもとに住んでいる私の地域の中学校では毎年、学校から筑波山までのハイキングと登山に挑戦する「チャレンジ筑波」がおこなわれている。その行事の中でゴミ拾いやあいさつを

して地域の人々とのかわりを深めたり、自然のすごさや大切さ、がんばることの素晴らしさなど、筑波山を通してたくさんの方を学んでいる。身近に、自然があるこの茨城県は教育の面でもよい影響を及ぼしている。

少し南に行くと、さつきまでの自然とはまた違った魅力はなつ科学の町つくばがある。数えられないほどの研究機関や博物館。身近になりつつあるロボット。最近では、ショッピングモールの一角などにもロボットが展示されている。多くの研究機関には、楽しく科学にふれることができるブースがある。そこではたくさん子どもたちが遊び感覚で科学を学んでいる。つくばでは、「つくばちびっ子博士」といって、特製のパスポートを持って、つくば市内の各研究機関等の展示やイベントなどを見学・体験しながら回るスタンプラリーを開催している。このように市内には科学についてもっと知るためのイベントやツアー、企画などがたくさんある。その効果もあってか、茨城県の子どもたちは、科学者や研究者になりたいなど、科学の楽しさを知り、夢を持っている。つくばには科学だけでなく宇宙に関する建物もたくさんあり、宇宙飛行士になったかのような体験ができたりなど、まだまだ希望にあふれている。

今まで紹介してきた自然豊かな茨城。近未来都市つくば。そして、現在その二つの力を結集した、茨城県の新しい特産品がある。それは、「つくば豚」である。つくば豚は研究所発ベンチャー企業の技術を活用し、遺伝子診断で、脂肪含有量の高い親豚のみを選別し、交配して生まれ、自然が多く、空気もきれいな茨城の豚舎で育てられた豚のことである。茨城

県の良さ、特徴がまったこの「つくば豚」は今、新しい茨城県の特産物として大きな期待を寄せられている。

このように、現在でも科学の研究や農業、酪農など、さまざまな面で力を発揮している茨城県。これからの未来、茨城県はもっと、もっと、発展していくだろう。今、科学を築しみ、ふれ合っている子どもたちの中から、科学者が生まれ、そしてまた茨城県は科学の先頭に立って進んでいくだろう。その科学の力を利用し、もっとおいしい野菜や肉などの品種改良が進んでいくだろう。

私は、植物などのDNAや遺伝子組み換えなどに興味があり、今後はそのような道に進んでいきたいと考えている。そして今後の茨城県の力になりたい。なっていきたい、そう思う。

これから、さらに成長していくであろう茨城県。これから、さらに変化していくだろう茨城県。私は、そんな茨城県の未来を託された子供の一人としての自覚を持って、これから先、まだまだ長い自分の人生を楽しんで、謳歌していきたい。

そう思える茨城県に生まれることができたことをうれしく思うと同時に、そのことをすごく誇りに思う。

あんしんにくらせるいばらき

守谷市立郷州小学校 一年 大^{おお}平^{ひら} あやの

わたしのちかくのうちに、よるどろぼうがはいりました。そのはなしをきいたとき、どろぼうにはいられたおうちはおわかっただろうな、とおもいました。そして、あんしんしてくらせるように、わたしはいつもなににきをつけているかか人がえてみました。

まず、とじまりすることがだいじです。そのほかにもわたしがとくになんばっていることがあります。それは、きんじよをあるくときにあつたひとにあいさつをすることです。あかちゃんのところから、うちのひとといっしょにちよいだないかいのかつどうにさんかしてきんじよのひととなかよくなることです。

あいさつをしてもげんきがないひともあります。へんじをしでくれないひともあります。わたしはそんなときあいさつをしているのに、あいさつをかえしてくれないのはかなしいな、とおもいます。もしかして、あいさつをかえしてくれないひとはしごとをしたあとでつかれているのかもかもしれません。そんなひとたちもそのときはあいさつがかえせなくても、またげんきになったらあいさつをしてくれるかもしれない。

わたしはどろぼうも、ひとごろしもない、あんしんしてく

らせるいばらきにすみたいとおもいます。そのためにもだち、きんじよのひととなかよくできるようにしたいです。わたしがあいさつをつづけていけば、ともだちやわたしのおとうとたちもまねをしてくれるとおもいます。わたしたちこどももあいさつでおとなのひとたちもあいさつをかえしてもらえようになって、あんしんしてくらせる「なかよしいばらき」にしていきたいです。

わたしのゆめ

常陸大宮市立大宮西小学校 一年 菅^{かん}野^の 愛^{あい}

わたしのゆめは、おはなやさんになることです。

なつやすみまえにわたしは、まいごぶらずまはいえんにゆういんしました。びょういんのせんせいになんいんしなくちやいけなさいといわれたとき、がっこうにいつておともだちとあそんだり、きゆうしよくをたべたりできないとおもったら、とてもかなしいきもちになりました。

おばあちゃんは、

「がんばって、びょうきをなおそうね。」

と、ばいてんでわたしのだいすきなぺんだんといりのおかしをかってくれました。びょうしつにもどろうとしたら、あかいさなばらとひまわりのおはなのもりかごをみつけました。おばあちゃんにおねがいをして、おはなもかつてもらいました。とてもきれいで、かわいくてうれしかったです。いたいてんできも、にがいおくすりがんばれました。

おばあちゃんが、おはなのことをたかすのおばちゃんにはなしたら、おにわのおはなをもりかごにしてみつもつくつてくれました。びょうしつがおはなでいっばいになりました。かんごしさんは、

「あいちゃんのおへやはきれいなおはながいっばいで、おはなやさんみたいですすてきだね。」

と、いいました。とてもうれしくなりました。

おはなは、みているだけでここにこえがおになつたり、げんきになつたりするんだな、おはなつてすごいなとおもいました。だからわたしはおはなやさんになつて、びょうきでげんきのないひとがげんきがでて、はやくびょうきがなおるよるに、すてきなもりかごのおはなをつくつてあげたいです。

かぞくのきずな

水戸市立梅が丘小学校 一年 今泉 遥

きよねん、つなみのとき、おおつのおばあちゃんがみつからなくて、おかあさんがよるに、おおつへさがしにいきました。どろだらけのおばあちゃんとおかあさんがやつとかえつてきて、わたしはおばあちゃんがいきつてよかつたとおもいました。わたしは、まっくらでくらいみちなのに、おかあさんがおおつにいっっちゃつてしんぱいだつたけど、かぞくのこをかんがえると、こわいときでもちからがわくんだなあとおもいました。

なんにちかして、わたしもおおつへいきました。どうろが

すなだらけで、いえもどうろもどろだらけでぐじゃめじゃでした。おばあちゃんちのいっかいもこわれていました。わたしは、びっくりしてこわいきもちだつたけど、ぞうきんをかいたり、こわれたものをすてたりしました。よるは、おふるがこわれたので、わたしがあかちゃんのときつかつたベビーバスにおゆをいれてはいりました。せつかくくんできたみずがほとんどあふれて、みんなでおおわりました。あと、つぎのひに、わたしがたなをつくつてあげたら、ななめになつてまがつてしまいました。でも、おばあちゃんは「うれしい。」といつてわらつていました。そして、みとにかえるとき、おばあちゃんがひとりでだいじょうぶかなとおもつてなきました。

わたしは、きずなのいみがまえはわからなかつたけど、いまはすこしわかつてきました。きずなつていうのは、ふつうのひはわからないけど、なにかたいへんなことがおきたときにわかるとおもいます。

かぞくやちいきへのおもいがおおきいと、きずなもおおきいとおもいます。

いばらき大すき

常総市立石下小学校 二年 高橋 紅 愛

東日本大しんさいがおこつたのは、わたしがようちえん生のときでした。すごいゆれで、とてもこわかつたのおぼえています。まわりを見てみると、しんごうがとまつていた

り、いえのやねがおちたり、へいがたおれたりして、一しゆんでせかいがかわってしまったようでした。わたしのすんでいるところでは、水どうが一週間くらいとまっていたので、お風呂に入るのも、トイレに行くのもとても大へんでした。いつも水がつかえるのがあたり前だと思っていたので、水がじゆうにつかえない生かつかが、こんなにあふべんで大へんだとは思いませんでした。でん気や水がふつうにつかえるのは、とてもしあわせなことなんだと学びました。

わたしのおじいちゃんのはのうかです。いつもおじいちゃんとおばあちゃんをつくった、おこめや、なしや、やさいをたべています。とてもおいしいので大すきです。東日本大しんさいのあとは風ひようひがいで、いばらきでつくったものがないぜんうれなかつたそうです。おじいちゃんは、一生けんめいそだてたのでとてもかなしいと言っていました。きちんとけんさをして、あんぜんだと分かっているのにどうして買ってもらえないんだろうと思いましたが、がんばってそだてている人がいるし、とてもおいしいいばらきのやさいやくだものを、たくさんの人にたべてもらいたいです。

いばらきは海もあるし、つくば山もあるし、日本で二ばん目に大きなすみがあります。としんに近いのに、しぜんがたくさんあります。わたしはそんないばらきが大すきです。わたしの大すきないばらきのよいところを、たくさんの人に知ってほしいと思います。いばらきのために何かやくに立てるように、わたしのできることを考えて、さがして、行どうしていききたいと思っています。

十年ごのぼく

二年 伊藤 太一

十年ごのぼくは、十八さいでこう校三年生です。

こう校三年生のことは、まだ分かりません。先生もだれ先生になっっているか、分かりません。

べんきようもはじめてのことがおおいのでドキドキしているかもしれません。

うんどうも、どういうことをするのか分かりません。

でも十年ごのぼくは、せが大きくなっていると思います。

たかいところまでせがとどくと思います。

手もたかいところまでとどくと思います。

ランドセルも大きくなっているかもしれません。

自でん車も大きくなっているかもしれません。

じ分でおもたいにもつも、もてるようになるかもしれません。

お金もいっぱいもっているかもしれません。

十八さいになったら、ぼくは車をかうかもしれません。

車のめんきよをもっているかもしれません。

こう校三年生になると、いろんなことができるので、十年ごがぼくは、たのしみです。

べんきようもたのしみです。

お家でも、じ分のできることがふえるかもしれません。

じ分できかなのせわもできるかもしれません。

十年ごがともまちどおしいです。

大人になるのも、まちどおしいです。

小学校がとう合して

常陸太田市立誉田小学校 二年 沼田 琉那

ことしの三月、わたしが一年かんかよった小学校とおわかれをした。とてもかなしかった。

「ねえ、どうして、ずいりゆう小学校がなくなるの？」
大すきだったずいりゆう小学校。大すきだった大きなさくらの木。本とうは、ずっとずっとずいりゆう小学校に、かよいたかったのに。

そして四月、ほん田小学校へかようことになった。なん回か、こうりゆう会はしたけれど、ものすごくふあんだった。「おともだちはできるのかな」「先生となかよくできるかな。」はじめてスクールバスにのって学校へつくと、はじめて見る先生もいて、どうしていいかわからない気もちだった。ずいりゆう小学校のときに見た先生もいた。「ちよつとは大じようぶかな。」

教室に入ると、今までは八こしかなかったつくえといすが、たくさんあった。「教室ってこんなにせまかったかなあ。」ってすごくふしぎなかんじがした。たくさんのお友だちが教室に入ってきて、ドキドキ、ワクワク。

さいしよは、新しいお友だちに声をかけることもできなかつたけど、今では、みんなとなかよくできると思う。

五月、いよいよようんどう会のれんしゅうがはじまった。ま

い日のれんしゅうで、だんだん話せるようになった。

ある日、土よう日で学校が休みのとき、お母さんのお手つだいをしていたとき、足をガラスのはへんで切ってしまった、きゆうきゆう車ではこばれる大けがをしました。月よう日、学校へ行くと、みんなが「大じようぶ？」と声をかけてくれた。

とてもうれしかったけど、走ったりとんだりできない。うんどう会のれんしゅうも見学。みんなとれんしゅうできないと、さみしかった。やつとけががなあって、みんなと一生けんめいれんしゅうをした。走ったり、とんだり、ダンスのれんしゅうも、みんなといっしよにできてたのしかった。本ばんも、大きな声でおうえんできて、とてもよかった。

とう合して、ずいりゆう小学校はなくなってしまうけれど、新しいお友だちがふえてよかった。そつぎようするまでに、あと四年もあるけれど、ずっとみんなとなかよくできたらしいな。

いじめなんてなくて、みんながたのしいと思える学校になればいいと思う。

いばらきの未来、私のゆめ

つくばみらい市立小絹小学校 三年 前川 夏葵

私は、今年の三月くらいに岩手からいばらきのつくばみらい市にひっこしてきました。

岩手では、大じしんで海がなくなりました。いつも

は、しずかな海に大きな手がいくつもいくつも出てきてみんなをさらっていききました。

私のおじいちゃんや、お父さんの妹のまきこおねえさんが流され死んでしまいました。

お父さんとお母さんは、何日も何日も体育館に行つて二人のことをさがしました。二ヶ月くらいで見つかりおそうしきをしました。

私は、かせつじゅうたくにいましたが、お父さんのお仕事か、いばらき県になったのでお母さんと弟とひっこしてききました。

弟は、ふたばようちえんに入り、私は、小絹小学校の三年一組に入りました。

あたらしいところなので、はじめてクラスみんなのまえでじこしようかいをしたとき、しんぞうがどきどきして、まれば先生に聞こえてしまうかなあと思いました。

あたらしいお友だちができました。

あたらしいあそびもありました。

あたらしい言葉もありました。

あたらしいべんきようもならいました。

それで、私は、いばらき県つくばみらい市が大すきになりました。

私は、大人になったらかんごしになりたいたいと思つています。病気の人のためになりたいと思つています。

岩手で、じしんにあったときたくさんのおいしゃさんやたくさんのかんごしさんが、私たちをたすけてくれました。先生やかんごしさんは、カップラーメンをたべてすぐまた、け

がをした人や病気の人をかけあしでやすまずにたすけてくれました。

私のゆめは、命をまもれるかんごしさんになることです。

きれいにしたい川

かすみがうら市立美並小学校 三年 稲いの生う亮りょう介すけ

夏休みに、いばらき県のひたち大宮市を流れている、な川という川に、家族みんなで遊びに行きました。

ぼくが遊んだあたりは川はばは、すごく広くて、流れはゆるやかでした。でも、少し深いところでは、流れが急に速くなる場所もありました。そういうところでは足がすべつて流されてしまうかもしれないので、ぼくはとても気をつけて遊びました。

遊んでいるうちに、川にはぼくが思つていたじょうに、たくさんの生き物がいることが分かりました。メダカのような小さな魚やトンボのような虫もいました。石の下を見てみると、ヒルもいてびっくりしました。たくさんの生き物が住んでいるのですが、水はかなりにごつていました。ぼくが着ていた白いTシャツが茶色になつてしまうほど、にごつていました。

また、ゴミもたくさんありました。水の中や河原には、あみやぐん手、ビニールぶくろ、トンダなどがありました。しぜん物ではないゴミがたくさんあるのは、川に遊びにきた人がすてていったものだと思います。

川には、小さな魚や虫たちがたくさんすんでいましたが、ぼくは心ばいになりました。なぜかという、水がにごっていたし、ゴミもたくさんあったからです。このままゴミがふえつづけたら、水の中の生き物は、この川には、任せなくなってしまうかもしれないあとと思いました。

川遊びは、とても楽しかったです。帰ってくる時、ぼくは川の中ですててあったビニールぶくろをひろってきました。川を少しでもきれいにするためです。

来年も川遊びに行きたいと思いました。来年は今年よりももっときれいな川になっているといいなあと 생각합니다。

しぜんいっぱいのいばらきけん

境町立猿島小学校 三年 大山愛理

わたしのすんでいるいばらきには、海も山も川もあり、とつてもしぜんがいっぱいのけんだと思います。春はお花見に行き、夏は海でおよいで、秋は山登りをして、冬は雪のふる日をとつても楽しみにしています。しかし、わたしは今ふしぎに思うことがあります。それは小学校への通学路についてです。道路はきれいになっていのですが、木や花がないということ。どうして、わたしの通学路にはしぜんがないのかなと、考えています。

春は、道のわきにみどりの葉っぱがたくさん、木やいろいろな色のお花がたくさん、朝は気もちよく、帰りはじつくりとかんさつしながらすごせると思います。夏は、朝から

ギラギラの太陽に当たりながらいっしょうけんめい歩いてるけれど、学校につくころにはグッタリしてしまいます。帰りも一番あつい時間にあせをたくさんかきながら家に着きます。通学路の横に木があれば、木のかげはすずしいからそこで休んで、太陽からにげることができると思います。秋は、みどりの葉っぱから黄色い葉っぱにかわる木をながめたり、たくさんあつた葉っぱがぜんぶ落ちてしまひまるはだかになる木を見ながら、おどろいたりわらったりしたいです。冬は、とつてもさむい中をがんばっていきっている木をおうえんしたり、土の中の春にめをだす花たちを見まもりながら、わたしもがんばる気もちをもちたいです。

いばらきのみらいには、すべての通学路にがんばつてのびていく木や心がうれしくなるようなお花がたくさんあると思います。もつともつとしぜんいっぱいでお花がいっぱいになるために、わたしたち一人一人も、生きているものを大切に思う気もちをもちつづけることがひつようだと思ひます。わたしのしょうらいのゆめはお花やさんになることです。

ぼくの自まんの山

つくば市立春日小学校 三年 香取 紳太郎

「今日は、雲のかさをかぶっているなあ。」

ぼくは、つくば山のかんさつをするのが大すきだ。つくば山は見る場所によって、色や形がかわるので、ふしぎで楽しい。

この夏旅行したハワイにも、ダイヤモンドヘッドという山があった。その山も、ワイキキとはんたいがわから見ると女の子がよこたわっているように見えた。げん地の人はその山を自まんに思っただけにしているようだった。ぼくは、

「ぼくのすむまちにあるつくば山もダイヤモンドヘッドみたいにいばらきのシンボルなんだなあ。」

つくば山は青く見えたり、三角にとがってMに見えたり、ひらべったく、ラクダのこぶに見えたりまるでいいじゅつ作ひんみたいだ。

そんなつくば山の小川でぼくはこの前カニヤトンボさがしをした。家の近くの気おんは、三十五度もあったのに、そこは木の間からの風が気もちよく、ずつと遊んでいたいぐらい楽しい場所だ。

でも、去年の春のはじめごろ、いとことつくば山にのぼった時、道から外れ、こわい思いをしたことがあった。まだ雪ものこっていたのでふ安でドキドキしたが、なんとかケーブルカー乗りばにたどり着いて、その日さい後のケーブルカーで下山することが出来た。その時は、つくば山という大自ぜんのこわさも感じた。だけど、やっぱり毎日ながめているつくば山は、ぼくにとつてさい高の自まんの山だ。

ぼくの家の近くには、また大きなショッピングセンターができると聞いた。買い物ずきなお母さんやお姉ちゃんは大好きだが、ぼくは、つくば山の大自然だけはそのまま置いてほしいと思う。そしていつか、つくば山のちよう上で大すきなペルセウスぎ流星ぐんをみたいなあ。

私が大好きなのは、茨城産の野菜

常総市立絹西小学校 四年 佐賀愛理

みなさんは、野菜が好きですか？ 私は、小さいころから野菜が大好きです。みんながきらう、にんじんやピーマンも平気で食べていました。それは、とてもおいしい野菜を知っているからだと思います。私のお母さんの育った家は農家で、いつでも新せんな野菜をとどけてくれます。それに、ひいおばあちゃんも、お家の庭で、私のリクエストした野菜を作ってくれます。

この二つが、私を野菜好きにしてくれたんだと思います。でも、東日本大しんさいによっておきた福島のがんばつ事故のせいで、茨城県の近くの県の野菜は、あまり食べてもらえなくなりました。おじいちゃんやおばあちゃんやひいおばあちゃんが、一生けんめい作ってくれた野菜も、なんだかわからないほうしゃせんセシウムが、私たちの体に、よくないと言う理由で、食べるきかひが少なくなりました。

すぐくさんねんで、せつない気持ちになりました。野菜を作るのはすぐく大変で暑い夏でも寒い冬でも朝は早く夜はおそくまで、野菜の世話をしなくてはなりません。

だから私が、おじいちゃんやおばあちゃん家に行っても、あまり遊んでもらえません。そのかわり、野菜がある畑につれていってくれます。そこで、とびつきり新せんな野菜をつまみ食いするのが私の遊びになります。

そんな私の楽しみも、げんぱつ事故のせいでうばわれてし

まいりました。おじいちゃんおばあちゃんの野菜を育てる楽し
みもうばわれてしまいました。

その事故から約一年と五ヶ月がたちました。事故から二度
目の夏、畑には、たくさんの夏野菜が実っています。まだほ
うしゃのうのえいきょうがのこっているかもしれないませんが、
おいしく食べています。おじいちゃんとおばあちゃんの野菜
もいろいろな県にとどけられています。

これからも茨城県の野菜がたくさんの人に「おいしい」つ
て食べてもらえたら、私はすごくうれしいです。そして私も
茨城の野菜を食べてけんこうな体をつくりたいです。

大好き農業未来の茨城

常総市立水海道小学校 四年 岡宮一史

「パンは楽しいな。」

ぼくのお母さんは、朝のいそがしいときに、よくこんなこ
とを言います。でもぼくは、パンよりもごはんの方が好きで
す。友だちに聞いてもごはんよりパンの方が好きな友だち
や、朝はパンを食べている友だちが多くいて、茨城県でもた
くさん作られているお米についてももう一度考えてみようと思
ったことが、作文を書くきっかけとなりました。

ぼくはお父さんと茨城県の農業について調べてみました。
日本全国でみると、茨城県は日本で第二位に農業がさかんな
県であることがわかりました。また野菜も、ちくさんも、お
米も、バランスよく作られていることもわかりました。四十

七都道府県もあるのにぼくは茨城県はすごいなと思いま
した。

さらに調べを進めていくうちに、茨城県の田んぼの広さ
が、へっていつていることがわかりました。また、茨城県だ
けではなくて、日本全国で同じように田んぼがへっているこ
ともわかりました。また、農家ではたらく人も少なくなっ
ていました。二十年間ではたらく人の数が半分になってしまっ
ていました。

ぼくは、このままでは茨城県だけではなくて日本全国が農
業に対する思いがなくなってしまうのではないかと心配にな
りました。だからぼくは、茨城県から今の農業をかえていき
たいと思いました。

そのためにも、茨城県の米のおいしさを人々に広めてい
くことが大事だと思います。

例えば、米のパンを作ってもっと給食にだしたりして、い
ろいろな食べ方で米を活用する取り組みをしていったらいい
なと思います。

また、世界の人々にも茨城県のお米を広めるだけではな
く、その世界の人々にあったお米に品種改良する取り組みで
茨城県のお米のおいしさを伝えて行きたいと思っています。

もう一つは、農業する楽しさを人々に伝えることで、農業
への意しきを高めていってほしいと思います。

ぼくは、家で野菜を育てています。害虫から野菜を守るた
めにネットをはったり、畑をたがやし、草むしりをしたり、
野菜を育てるのは大へんです。でも、しゅうかくするとき
は、とても楽しいです。とれたての野菜はあまかったりみず

みずしかつたりして、とてもおいしいです。

ぼくは、野菜を作ることの楽しさを人々が感じることができたら、もつと農業への意しきが高まると思います。ぼくの弟のようち園では、自分たちで育てた野菜をしゅうかくして、給食に出しています。ぼくは、小さい子からお年よりまでみんなで野菜作りを楽しめる「野菜作り教室」を開いて、農業の楽しさを伝え、農業する人々がふえるようにしていきたいと思います。いつか茨城県を全国第一位になるぐらい農業がさかなな県にしていきたいと思います。

実り豊かな茨城の農業

稲敷市立あずま東小学校 四年 鳥と羽ば啓けい太た

夏休みが終わるころ、ぼくのおじいちゃんの家でも稲かりが始まりました。今年はしん災の復こうの遅れでいつもより約一ヶ月遅れの田植えだったけれど、天気もよくすすくと稲が育ち今年も稲かりを行う季せつがやってきました。

ぼくの住んでいる稲しき市は周りが田んぼに囲まれた自然豊かな所です。近くにはかすみヶ浦もあります。れんこんやブロッコリー、かぼちゃや米、いちじくなどの農作物が作られています。特に米のミルククイーンという品種はこの地域から生まれたブランド米で実さいぼくも食べている米なので自まんです。

その他にも茨城はたくさん野菜や果物が作られている自然と実り豊かな所です。とくにメロン・れんこん・はくさい

は、全国一の生さん量でおどろきました。スーパーやテレビで茨城産農作物を見かけると「この野菜は地元でとれたものなんだ!!」とうれしくなります。もちろんぼくが家で食べる野菜も茨城産のものが多くそうです。

こうしているんな種類の野菜や果物を食べる事ができるのも農家の人達のおかげです。植える時期を気にしたり、天気を気にしたり、おいしい物がしゅうかくできるように気をくばりながら作業をしています。いつも同じじょうたいで同じ物がとれるわけではないのでいろんな技じゅつも必要だし、問題をのりこえていかなければならないので大変な仕事だなと思います。

また、その技じゅつを学ぶために外国から勉強にきている人達がいることも知りました。茨城で学んだ農業の技じゅつがどんどん世界へ広がっていくことはすばらしいことだと思えます。

このすばらしい茨城で生産されたすばらしい野菜や果物を今以上の多くの人達に知ってもらうためにもつとアピールしていきたいです。そして茨城のブランドがたくさん開発され、そして農業をする人達がふえていけばいいなと思います。

ぼくの大すきな茨城がいつまでも自然と元気がいっぱいいる明るい茨城であってほしいです。

「大好きな私のまち」

筑西市立上野小学校 四年 篠塚 ちひろ

私は、十年前の夏、この緑ゆたかな筑西市に生まれました。近くには筑波山がとても大きく見えます。まるで私たちを見守ってくれているようです。「どこかでまいごになっても筑波山をめざしていけば帰ってこられるよ。」と、お父さんが言っていました。そのまわりをかこむように、田んぼや畑が広がっています。そして、田んぼに水が入るとカエルの合唱が始まります。はじめて聞く人はうるさいと思うかもしれませんが。でも私には普通なこと、夜は気持ちよい子守歌になります。ほかにもザリガニやトンボ、カブトムシなど生き物もたくさんいます。空気や水がきれいだからだと思います。

また、私の住む明野地区では、自然にあふれた行事もさかんです。四月、桜がさく時期に、「明野たきぎ能」が行われます。満開の桜の下で能楽師やきょう言師がかれいにまう行事です。平成四年、日本の伝とう文化を地元にしようとしたい、という市民の熱い思いから始まったそうです。また、夏の終わりには、明野ひまわりの里で「ひまわりフェスティバル」が開さいされます。百万本のひまわりやコスモスがさき、とてもきれいです。後ろには、筑波山が見えて、ばつぐんのけ色です。どちらも見物客がたくさん来る自まんの行事です。

私のまちのよい所は、まだまだたくさんあります。それは住んでいる人たちが、みんなやさしいということです。登下

校中は、交代でパトロールをしてくれ、いつも笑顔で私たちを見送ってくれます。近所のおばちゃん畑でできた野菜を持ってきてくれるので、新鮮な野菜をおいしく食べられます。この前の、東日本大震災の時に電気が止まってしまい困っている時、ガスがまでご飯を炊いて持ってきてくれたおばちゃんもいました。「子どもたちが白いご飯を食べたいだろうから。」と自分の家もかわらが落ちたりして、大変なのにみんなの家に配っていました。本当に心があたたくなりました。お母さんも、「絶対、忘れちゃいけないよ。」と言っていました。このように、この町には、少し言葉があらいけど、心のあたたくい人たちがたくさんいます。私は、そんなやさしい人たちの笑顔とすばらしい自然を守っていこうと思います。

私の描いた未来の茨城

五霞町立五霞東小学校 五年 隈元 由太

ぼくは、生まれも育ちも茨城県です。だから、この茨城県がぼくにとつての「ふるさと」になります。ぼくは、この五霞町のある茨城県が大好きです。茨城県には、海や筑波山などの山もあり、たくさん自然が残っています。また、つくば学園都市のような未来都市みたいな町もあります。たくさん工場もあります。でも、多くの人は茨城県のことを、「いなか」扱いしているような気がします。テレビなどで茨城県を何となくバカにしているような話を聞くと、とても頭に来

ます。

ぼくの好きな茨城県には、高速道路もあるし、茨城空港もできたし、つくばエクスプレスもあるし、まだまだ発展する可能性がたくさんあると思います。ぼくの通っている五霞東小学校の近くにも、近い将来には圏央道ができて、五霞インターチェンジもできます。ぼくのお父さんなどは、車で出かけるのが便利になるので、とても楽しみにしています。

でも、ぼくには、心配なことがあります。それは、田んぼがなくなったり、車が増えて空気がよごれて、白さぎなどの野鳥がいなくなってしまうかもしれないということです。鳥だけではなく、ザリガニやカエルなどもいなくなってしまうのではないかと心配です。

ぼくは、お父さんから、茨城県は、農家をやっている人が全国一位の県だということを教わりました。ぼくの住んでいる五霞町にも、たくさん田んぼや畑があります。緑がとても多く、きれいな町です。どんなに交通が便利になって、人や車が増えても、この緑のきれいな町を変えたくありません。茨城全体でも、たくさん田んぼや畑があります。そして、たくさんのお米や野菜を生産しています。「いなか」扱いはされるのは、少しイヤだけど、やっぱり自然が多いほうが、ぼくは好きです。

ぼくは、何才まで茨城県に住んでいるのかはわかりませんが、将来の茨城県は、今のような自然がたくさん残っている茨城県でいいと思います。そして、何十年たっても、「緑のじゅうたん」のような田んぼが広がる茨城県であってほしいと思います。ぼくは、この茨城県が「ふるさと」であること

をほこりに思っ、これからも茨城県の自然を大切にしていきたいと思ひます。

守りたい伝統行事

稲敷市立あずま南小学校 五年 山^{やま}中^{なか}美^み夏^{なつ}

私は茨城県で生まれました。お父さんも、おじいさんも茨城県で生まれました。

私の住む地域には、昔から長く続く伝統行事がたくさんあります。お盆の時期になると毎年行われる、「おだち」という行事があります。「おだち」は、おだちぼうという大きなぼうを持って、子供たちが豊作を祈る行事です。前までは、男の子しか参加できない行事だったけど、子供の人数が減ったので、今は女の子も参加できるようになりました。

毎年八月十三日の夕方になると、小中学生が集まっておだちの準備を始めます。私も自分の家の名前が入ったちようちんと手ぬぐいを準備して、集合場所へ行きました。まだ日がいずんでいなかったので、とても暑かったけど、気合を入れてがんばりました。男の子がおだちぼうを持って、私達女の子と低学年の男の子はちようちんを持って、

「ほーらやっしよ満作だ。今年も豊作満作だ。」

と、中学生がたたく太この音に合わせて、大きなかけ声をかけます。四十七軒の家を一軒ずつ回るので、終わるころには夜になります。とても大変な行事だけど、私のお父さんもおじいさんも、みんな子供のころに参加した話を聞くと、私も

参加できてよかったと思います。お父さんが子供のころには、今よりもっとたくさんの子供がいて、はく力があつたそうなので、そのころのおだちを見てみたかったなと思いました。

私たちの地域は子供の人数がだんだん少なくなつてしまひ、今年のおだちに参加した人数は全員で十人でした。来年になると、小学生は四人になつてしまひ、ぼうを持つ男の子がいなくなります。

「おだちという行事がなくなつてしまふのは、とてもさびしい。」

と、お父さんが言っていました。私も本当にそうだなと思ひました。

おだちだけでなく、昔から続く行事がいろいろな理由によつて、少しずつなくなつてしまつていけると聞きました。それはとてもさびしくて、もつたいたいなと思ひます。これから私は少しずつ大きくなるけれど、茨城に今住んでいる人たちや、これから生まれてくる子供たちのために、少しでも多くの伝統行事を大切にして、受けついでいけたらいいなと思ひます。

ぼくが茨城県知事になつたら

茨城大学教育学部附属小学校 五年 永沼大誠

ぼくは水戸市に住んでいて水戸市が大好きです。でも茨城県はというと、田舎のイメージが先行してあまり好きではあ

りません。

多分、ぼくのように地元は好きだけど、茨城県全体を見ると、マイナスイメージと考える人は多いと思ひます。

ここで、茨城県イメージアップ作戦が始まります。

茨城県は山や平野や海がある恵まれた地形で、災害も比較的になく、ごう雪や台風も少ない住みやすい気候です。何より東京都や成田市に近いという利便性、豊富な農作物など、み力あふれる県なのです。

それなのに、県民の郷土愛が少ないのです。

これが一番の問題だと思ひます。

まず、茨城県が大好きになるように小学校で郷土愛の授業を充実させることです。

茨城弁も正しく学び、県の良い所を誰も十個は言えるようにし、県出身の有名人を覚え、皆で応援していくということです。

また、豊富な農作物の産地を覚え、皆で県産の農作物を広く活用すると良いと思ひます。

納豆は県民食として、毎日食べるようにさせたいと思ひます。

この様に、郷土愛が強ければ、どこに住んでいても好きなものは好き。という体質を幼少時代から作りあげていく作戦が必要だとぼくは思ひます。

茨城県は東京都にはなれないんです。どうせ自然豊かな田舎な県なんです。それならそれで良いのではないのでしょうか。

県知事をはじめ、みんなもつと茨城弁を堂々と使ひましよう。

県民がもつと茨城県を大好きになれば、きっと他県の人たちも茨城県に興味を持って、

「ちよつと茨城県へ行ってみるか？」

となるのではないのでしょうか。

都道府県人気度ランキング最下位でも良いではないですか。反対にそれをアピールポイントにしてしまえば良いと思います。

「他県からの人気ワーストワン。でも県民の郷土愛はナンバーワン。」

ぼくは、こんな茨城県出身だと胸を張って言える知事になってみたいです。

最後に、県民みんなが、

「いばらきけん。」

と、自分の県名を間ちがいなく言えるようになることも、ぼくの夢です。

わたしの将来の夢

銚田市立舟木小学校 五年 飛 沢 真 結

わたしは、この茨城が大好きです。自然の中で、家族とバーベキューをしたり、地域のお祭りに出かけたりすると、この街を守っていききたいという気持ちになります。

わたしの将来の夢は、この地域の人が笑顔で暮らせることです。特に、疲れている人の疲れを取る仕事ができたらと思っています。

なぜ、わたしがそう思うようになったかと言うと、ある日疲れていた母にマッサージをした時、母がとても喜んでくれて、「マッサージのおかげで疲れがとれたわ。」と言ってくれたことがあります。わたしのマッサージで母が笑顔になるのを見て、わたしも、とてもうれしくなりました。

その日から、少しでも母の疲れが取れたらと、家にあったマッサージの本を見て、やり方を研究しました。そして、時々母にマッサージをしてあげると、「上手になったね。本当に楽になるわ。」と気持ちよさそうに笑ってほめてくれます。そんな母を見ると、わたしもなんだか元気がわいてきます。

わたしは、あまり自分から人に声をかけたりするのが得意ではありません。でも、母のマッサージをきっかけに、困っている人を見かけると「疲れているの。大丈夫。」と声をかけたくなりました。

ある日、勇気を出して、疲れた様子の先生に、「大丈夫ですか。手伝いますか。」と声をかけてみました。先生はにっこり笑って「ありがとう。その言葉で元気が出たわ。」と喜んでくれました。ドキドキしましたが、先生の笑顔を見て、心が何だかあたたかくなった気がしました。

わたしには、専門の知識があるわけではないので何か特別なことはできません。でも、ほんの少し勇気を出して、困っている人に声をかけたり、小さな手助けをしたりすることで、みんなが笑顔になることがうれしいです。

人と人がつながっていったり、協力し合ったりすることは、難しい時があります。しかし、東日本大震災の時、学校

の友達が、近所の人が、家族が助け合い、はげまし合い、大変なことでも乗り越えてきました。あの時、クラスの友達に「大丈夫。がんばりすぎないでね。」と言葉をかけてもらった時の、何とも言えないあたたかい気持ちは、今でも忘れていません。

将来私に何ができるのかは、まだはつきりとはわかりません。しかし、疲れている人には、私のマッサージで元氣を取りもどしてもらったり、人と人をつないでいくような仕事をしたいと、強く思っています。そして、わたしの大好きなこの街が、この地域が、笑顔が一番すてきな街になることが、わたしの夢です。

そのために、今わたしができることを一生けん命やっています。勇氣を出して、困っている人に声をかけていきたいです。

僕の夢

筑西市立養蚕小学校 六年 おか 岡 もと 本 ゆう 佑 と 都

僕は、三年生の頃から六年生の今まで変わらない夢があります。それは学校の先生です。

どうして、この夢を持ったかは、三年生の頃、僕は、自分でも、どうにもならない事があり、心の中に、もやもやとした、気持ちが出て来て、そのもやもやが、どんどん大きくなり、学校へ行くのがこわくなりました。お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、先生、みんなが心配してくれ

ました。お母さんは、時々泣いていました。それを見て、お母さんごめんなさいと心の中で僕は思っていました。でも、学校へ行く勇氣を出す事が出来ませんでした。毎日、毎日、朝になるのがこわかったです。でも、学校の先生が、毎日、むかえに来てくれました。担任の先生や、生徒指導の先生、教頭先生。毎日、むかえに来てくれました。お母さんとも毎日、毎日、話しました。ケンカもしました。お母さんに、無理やり車に入れられ、学校へ連れて行かれる事もたくさんありました。教室まで行く勇氣がない時は、保健室にいました。保健の先生ともたくさん話をしました。朝むかえに来てくれる生徒指導の先生とも、色々話しました。

「今日の給食は、おいしいぞ。」

「今日は、お楽しみこんだてだな。」

話しをしている時は楽しいのですが、

「さあ、学校へ行こう。」

と、言われると、絶対に行きたくない、という気持ちになってしまうのでした。

ある日、お母さんが言いました。

「子供は成長する時、頭と心のバランスがとれなくなる時がある。お母さんにも、あったよ。学校へ行きたくない時が、誰だつてある。でも、今、自分で、勇氣を出し、前に進まないと、大人になった時にこまるよ。一歩ふみ出せば、二歩、三歩とどんどん前に進んで行けるよ、勇氣を出すための勇氣を持つとうね。」

先生も、いつも言ってくれました。

「佑都さんの気持ち分かります。」

僕は、気づきました。

「僕の気持ちをお母さん、先生達がわかっているんだ。」

「勇気を出してみよう。」

その時、学校の先生になると決めました。

僕の母校となる、養蚕小学校で先生になり、僕を見はなさないでくれた先生方に、おん返しをしたい。そして、僕みたいな生徒を救ってあげたい。

今、あの時をふり返ってみると、勇気を出す事を、なぜあんなに、こわがっていたのか。

一度、勇気を出せば前に進めると学びました。

学校の先生になりたいという夢がかなうかは、わかりませんが、自分で、夢を目指し、前を向き、がんばりたいと思います。

未来の私

古河市立中央小学校 六年 江原奈穂

「小学校の先生になる」これが私の夢です。小さいころから、何となく「先生」という職業につきたいと思っていました。でも、今の担任の先生と出会い、その気持ちは、確かなものに変わってきました。

先生は、面白くて、いつも笑顔で元気いっぱいです。授業は、私達が楽しく進められるようにと手作りの問題プリントを作ってくれたり資料を準備してくれます。とても分かりや

すくて楽しいです。

クラスで何か問題が起きるといつものにこにこ笑顔がしんけんな顔になって相手の人の気持ちになって考えてみよう!! と言って話をしてくれます。それから、クラスのみんなの誕生日には、一人一人にメッセージカードを書いて渡してくれます。毎日、たくさんさんの仕事があつて大変なのに……。私は、そんな先生の一人一人を大切にしてくれるところが一番好きでもっともそんけいしています。

今、ニュースや新聞で「いじめ」が大きな問題として取りあげられています。様々な地いきで色々な対さくをしていることを知りました。私は、先生が話してくれたように相手の気持ちになって考えることができれば問題は、大きくならぬいのではないと思います。

私は、大好きな先生が教えてくれたたく山のことをわすれず、自分が先生になった時に生かしていきたいと思っています。

その時は、今さわがれているような「いじめ」問題がなくなっていれば良いなあと思います。

そのころ、茨城県はコミュニケーションがとれるし設がたくさんあればいいなあと思います。近くの学校だけでなく、遠くの方の学校とも交流して様々な事を一緒に体験できる場所。また、海外の人たちとも気軽に交流できればいいなあと思います。たくさんさんの人たちと出会い、仲良くなれば悩みができたときも、どこかに仲間がいるという気持ちになれて安心した気持ちになれると思います。そんな、すてきなやさしい茨城県になればいいなあと思うし、自分もそうなるようにいろいろと協力していきたいです。そんな茨城県であこがれ

の先生のような「先生」になりたいと思います。

家族のきずな、地域のきずな

水戸市立寿小学校 六年 高橋優生

今年も暑い夏がやってきた。夏と言えば、まず一番のイベントはお盆。なぜか、ぼくは小さい頃からお盆が大好きです。お盆は毎年茨城町にあるおじいちゃんの家に行きます。

おじいちゃんの家は、キラキラと輝く涸沼のほとりにあり、吹き抜ける風はとてすずやかで、ヒヌマイトトンボという珍しいとんぼを見る事ができます。辺りは一面大自然に囲まれ、豊富に実った採りたての野菜は最高です。そして、お盆になるときれいなちようちんをたくさんかざり、祭だんには、なすやきゅうりで作った牛や馬、おばあちゃん特製のぼたもちやごちそうが、あふれるほどに並びます。家族もみんな集まり、とてにぎやかで、毎年楽しみでした。

しかし、今年のお盆は、ぼくにとつて、一味違うお盆となりました。それは、ちょうど一年前の夏、ぼくは、初めての体験をしたからです。

「行ってきまーす。」
「行ってらっしやーい。」

いつもの、お母さんの元気な声。当たり前の生活。しかし、お母さんは病気になる、入院して手術を受ける事になったのです。いつも元気なお母さんがそんな事になるなんて、考えたこともなかったので、とてもショックで、不安でたま

らなくなりました。

入院の前日、お母さんから、一冊のノートを渡され、明日から一ページずつ見る様に言われました。翌日、早速見てみると、「おはよう」から始まり、「おやすみ」まで、日常での生活内容や会話が交換日記の様に細かく書かれています。お母さんは病院にいてもぼくを思ってくれている。そう思うと、涙が出ました。そして、ぼくもよくよくないでお母さんのためにがんばろうと思いました。

お母さんがいない間、おばあちゃんがきてくれ面倒をみてくれました。お父さんとも協力し合いながら、ぼくも、おばあちゃんを手伝いました。それに、近所の人が、毎日、ゆでたてのとうもろこしや、すいかななどを届けてくれ、ぼくの様子を見に来てくれたり、学校の担任の先生も、「ゆうきが元気ならお母さんも喜ぶ。ゆうきなら大丈夫。」と励ましてくれました。

いつもは、あまり感じなかったけど、ぼくは、家族や近所、学校等、色んな人達に支えられて生きているんだと心から実感することができました。

あれから一年が経ち、今年もお盆がやって来ました。お母さんの元気な声と共に家族の笑顔であふれる、にぎやかなお盆です。今年のお盆を家族みんなで元気に迎えられる事は、決して当たり前の事ではなくて、とてもありがたい事なんだ、と改めて感謝し、ご先祖様にお線香をあげました。

来年のお盆も、みんな元気で感謝の気持ちをかみしめ、お盆を迎えたいと思いました。

発信したい、茨城のよさ

茨城大学教育学部附属中学校 一年 宮^{みや}田^た ひかる

私は茨城が大好きだ。海も山もある。湖もある。四季折々の美しさが味わえる。風光明媚で素敵な所だと思っている。でも、茨城県の自慢は風景だけではない。私は、茨城県が全国に、いや世界に誇れるものは、学問を大切にし、教育に力を入れてきた歴史だと思う。

私に通っていた小学校のすぐ近くには、弘道館があった。暖かい春風が吹く頃になると、弘道館を囲む白壁の上からつぼみをつけた梅の枝が顔をのぞかせていた。梅の花が咲くと春がきたんだなあ、とうれしい気持ちになったものだ。そんな弘道館が、歴史的にとっても価値のある学校だったと知ったのは、六年生になってからだ。弘道館に関する講演に、母と一緒に参加したことがきっかけだった。弘道館は、へいに囲まれていて中が見えないため、一体どんなところなのか、実際にはよく分かっていなかったのだ。

弘道館は、水戸藩九代藩主徳川斉昭が建てた藩校だ。斉昭は、多くの反対の声や経済的な困難に阻まれながらも、私財を投じて建てたものだ。弘道館は、水戸城内に建てられ、今の総合大学のようなものだった。文学、地理、天文学、数学、兵学などの学問や、剣術、水泳などの武芸を習得する場があった。また、弘道館には、医学館が設けられ、本間玄調を中心に、医学の研究が行われた。当時は天然痘が流行し、多くの人々がこれによって命を落としていた。医学館では、天

然痘を予防するために種痘の研究を進めた。なかなか種痘を受けたがらない人々に、種痘の安全性を知ってもらうために、藩主斉昭は、自分の子どもにも種痘を受けさせていた。当時、弘道館の研究は最先端のものだったのだ。

なぜ、斉昭は苦勞しながらも、弘道館を建てたのだろうか。それは、学問に力を入れて優秀な人を育て、その人たちの力で水戸藩、さらには日本をよくしようと考えたからだ。全国的に有名な偕楽園も、弘道館での学問で疲れた頭をリラックスさせるために造られたものだ。「偕楽園」という名前の通り、「民と偕に楽しむ」という意味がこめられており、藩士ばかりでなく、一般庶民にも入園が許可されたという記録も残っている。斉昭は弘道館を建てることで、学問の大切さを身をもって訴え、人を育てることを実践し、そして、人を尊重したのだ。そう考えると、もう二百年もの歳月が流れているにもかかわらず弘道館からは、そこで学んだ人々のエネルギーや意気込みが感じられ、ゾクゾクしてくる。私たちの茨城県では、当時の最先端の学問が行われていたのだ。そして、日本をリードする人達が巣立っていったのだと思うと、私自身、重みや責任感を感じてしまう。弘道館という歴史のある場所の近くで勉強できることは、実はすごく貴重なことだったのだ。

しかし、こんな素敵な茨城県なのに、その魅力はあまり多くの人々に認知されていない。残念なことに、魅力度調査では下位に甘んじている。そして、世界遺産の登録も実現されないうちに、東日本大震災で被害を受けてしまった。弘道館の世界遺産登録を実現できるよう、私の大好きな茨城県の魅

力をたくさん発信したいと思う。私は、茨城県の魅力を発信するためには、観光をさかんにすることが大切だと思う。そのためには、たくさんの人に茨城を知ってもらわなければならない。中学生の私たちができることは、他県との交流で茨城のよさを伝えたり、茨城県民が協力して観光名所を増やしていったりすることだと思う。インターネットを利用して情報交換したり、弘道館のホームページ作りに参加したりするのも有効なのではないだろうか。茨城県を最大限に生かしてよさを伝え、私たちが大切にしてきたものを守っていくことが茨城県の活性化につながると思う。学問を重んじ、人を育ててきた茨城県。その魅力を日本、世界中のたくさんの人に発信していきたい。

食の王国を目指して

つくばみらい市立立谷和原中学校 一年 豊島想太

今年もまた暑い夏がやってきました。五月に田植えをした私の家の稲もたくさんの実をつけて、稲穂がでてきています。これからまだまだ暑さが続くなか、稲刈りをしてようやくお米が出来上がります。私たちが食べているお米には長い時間とさまざまな手間がかかっているのです。

日本の米の生産量を調べてみると、平成二十三年では一位北海道、二位新潟県、三位秋田県で四位が茨城県です。他の農作物を調べてみると、意外と茨城が生産量上位のものが多く、ということがわかり驚きました。全国一位の物はれんこん・メロ

ン・栗をはじめ、チンゲン菜・白菜・ピーマンです。特にれんこんは、日本の生産量の約四割が茨城県産です。また二位、三位の農作物を調べると、実に多種多様で茨城が農業王国だということがよくわかりました。

なぜ農作物の生産量が多いのでしょうか。それは茨城は山が少ないことにあります。茨城県は平野が多いため、それだけ農地になる面積が広いのです。県の総面積の約三割を農業用の耕地面積が占め、耕地率や農業人口、農家戸数が全国で一位になっています。

また、いろいろな種類の作物を収穫できるのは南限と北限が重なっているからです。それによって、温かい地域の作物と寒い地域の作物を育てることができるのです。みかんとりんごの両方を育てられるのは茨城だけだと初めて知りました。

さらに、茨城は漁業も盛んです。茨城県沖は暖流と寒流が交わっているために南と北、両方の魚介類を大量に漁獲することができます。暖流の魚介類は、寒流の影響で身が引き締まってとても美味しくなるそうです。その美味しさから茨城県沖でとれる魚介類は『常陸もの』と呼ばれ、高級ブランドの代名詞として高値で取引されています。潮が渦巻く海域なので、魚のえさとなるプランクトンも多く、えさを求めて数多くの魚が集まります。平成二十年には漁業生産量が全国五位、さばは毎年日本一の漁獲量です。海だけでなく、霞ヶ浦のワカサギや涸沼のしじみ、那珂川のアユなどの、淡水の漁業も古くから盛んです。

このように農作物や魚介類などの食物が豊富にとれるとい

うことを、茨城にずっと住んでいる私も知りませんでした。私はもつと茨城の農作物や魚介類が有名になればいいと思います。そのためにはもつとPR活動をした方がいいと思います。

生産量が一位の農作物や魚介類を使った料理のレシピを作り、まずは学校の給食などのメニューにしたら良いと思います。それを各家庭に広め、県内のレストランなどで提供し、いろいろな人に食べてもらえたら良いのではないのでしょうか。

また東京や近隣の県に住んでいる人達を対象にした「収穫祭」を開催して、実際にこんなところでこんな作物を作っているということを知ってもらい、知名度を上げるのもいいと思います。茨城の安心で安全な食べ物を日本中の、または世界中の人達にPRして、茨城県が誰もが知っている食の王国になればうれしいです。

茨城大好き

常総市立石下中学校 一年 なか 中 じま 島 ち 千 ひろ 尋

ぼくは茨城県で生まれ十二年間ずっとこの地で暮らしています。買い物など不便を感じる事もあるけれど、茨城県の生活がのんびりしていて合っていると思っっています。ぼくは豊かな関東平野の中にあつて、おいしい米や野菜がたくさんとれて、あまり雪の降らないこの土地が大好きです。

ぼくが茨城でよかつたと思う理由を三つ紹介します。一つ

は、緑が多く自然に親しむことが出来るからです。小学校のころ、秋になると十一面山で行われる栗拾いに参加していました。その時、自然博物館の先生が同行して植物の説明をしたり、鳥の説明をしてくれたりしました。栗拾いだけが目的ではなくて、十一面山の自然を守る活動が目的でもあるので、植樹したり普段経験できないことも体験させてもらいました。この自然はただ放置されているだけでなく、人の手によつて整備されてはじめて、「気持ちのよい自然」なんだなと活動に参加して感じました。そんな、緑豊かなところが好きです。

第二に、科学教育に力を入れているところです。茨城には科学教育プロジェクト事業があつて、小学校のころ県内各地の科学館、地質標本館などたくさん施設を見学しました。ぼくはこのような施設が大好きで、何度も連れて行ってほしい、そのたびに新しいものに興味を持ちました。そしてぼくは、今ではちよつとした石のコレクターとなりました。薄い白雲母、金色の光沢の黄鉄鉱、オパールやテレビ石などを部屋にかざっています。また、元素記号にもとても興味を持って楽しく覚えることができました。遊びながら学ぶことができる施設がいくつもあり、研究都市もあるというのもぼくが茨城が好きな理由の一つです。

第三に、国際文化に触れられるところです。ぼくの町にも多くの外国人がいます。ブラジル、フィリピン、スリランカなどたくさんの方から常総市に来ています。つくばはさすがに国際都市、多くの研究者や留学生が来日して学んでいます。ぼくの家は国際協力会に所属しています。だから毎年何

度か、留学生がホームステイにわが家にやってきます。遠くアフリカのケニア、バンングラディッシュ、ウズベキスタン、マレーシア、インド、韓国、中国、スリランカなどいろいろな国の人と友達になりました。アフリカは暑い国と思いきや高かったです。でも、ホームステイに来た人の住む所は標高が高かったので、暑すぎずまた乾燥しているので、日本の暑さとは異なるということを知り驚きました。スワヒリ語で「ハクナマタタ」は「心配ないさ、どうにかなるさ」という言葉であることも知りました。このようにいろいろな国の言葉と出会えるのも楽しいです。

ぼくは「自然」と「科学」と「国際文化」この三つがそろっている茨城が大好きです。

この先どんな未来に進むかは、はっきりと決めていません。しかし生まれ育った親しみある茨城を離れたくはありません。今、ぼくが感じているようにぼくの子供にもこの茨城の良さを伝えてあげたいと思います。ぼくが大人になったころどんなふうになっているのでしょうか。いつまでも住んでいて「楽しい」「落ちつく」「この土地に生まれて良かった」と思えるといいなと思います。科学に力を入れてるので、これからもいろいろ発展していくと思いますが、「古き良き物」を大切に残留していくことも忘れたくありません。なぜならその両方がバランスよく混在しているのが茨城の良い所だからです。

私が茨城県知事になったら

桜川市立岩瀬西中学校 二年 伏木隆大

「いばらぎ県。」「そうじゃなくて、い・ば・ら・き・県。」テレビやラジオでそのような会話を何度か見たり聞いたりしました。

地域ブランド調査都道府県ランキングで茨城県は三年連続最下位です。

本当に茨城県は、魅力がないのでしょうか。

大洗の海、筑波山、霞ヶ浦、袋田の滝などの観光名所もたくさんあります。また、コシヒカリや常陸秋そば、常陸牛、ローズポークなどおいしい特産物も色々あります。さらに、水戸黄門の西山荘、岡倉天心の六角堂などを代表とする歴史的建造物も数多く見られます。

それなのに、この茨城県の人気のなさ。

一番の問題は、茨城の本当の姿がよく知られていないということです。その問題を解決するために、私が知事になったら行いたいことがあります。

私達が家族で旅行に行く時はインターネットで目的地の観光スポットや名物料理、お土産などを調べてから行きます。多くの方が同じようにネットで情報を得ているのではないのでしょうか。

そこで、茨城県のホームページを見てみました。

そこは、東日本大震災情報や竜巻災害関連情報、その他健康や教育に関するお知らせなど県民のくらしのためのサイト

になっていました。

しかし、観光のページを見てみると、一通りのことが書かれているだけで、詳しい内容があまり書かれていませんでした。これでは、茨城に行きたいと思っっている人も、情報を入力することが難しいと思います。

そこで、県知事になった私は一つの案を実行します。

「おもしろ茨城大発見!!」という第二の茨城県ホームページの立ち上げです。

そして、それは見ているだけでも楽しいものにします。そうすれば、茨城に興味を持ってもらえ、「行ってみようかな。」と思ってくれる人が増えるでしょう。

そのために、年に一度、興味を持ってもらえるようなサイトを作るコンテストを開き、その中の優勝者が期間限定でホームページを企画・運営します。

そうすることにより、様々なアイデアが取り入れられ、より活気に満ちあふれたサイトになることでしよう。

立派な美術館や博物館も、その建物を見に行くのではありません。素晴らしい絵画や彫刻、興味深く貴重な展示物の人々は見に行くのです。

ですから、ホームページの内容を充実させると共に、茨城県そのものを魅力ある県にすることが大切です。

茨城県は日本でも有数の農業大国です。おいしいものがたくさんあります。そこで、アウトレットモールのフードパビリジョン「グルメタウン」を県内の各地域に作ります。そして、それぞれの地域の特色ある食材を使った料理を出す皆さんの店が集まれば、茨城を訪れる人はきつと増えることで

しょう。

そうすれば、地元での農業・漁業に従事している人もますます元気になり、観光地も活性化すると思います。

もう誰も、「いばらぎ県」などとは言わないでしょう。

「うまいものを食べたければいばらぎへ。」

日本全国全てのの人に思ってもらえるように頑張ります。

まるごと好きになろう

つくば市立竹園東中学校 二年 遠藤愛

私は、つくば市生まれのつくば市育ちです。だから、つくば市以外の地域のこととはよく分かりません。でも、つくば市のことなら、人一倍良いところもそうでないところも知っているはずですよ。

まず、私がつくば市を愛している一番の理由は、どこに行っても必ず「緑」があることです。つくば市には、筑波山がある北部の田舎らしい場所と、研究学園都市として知られる中央部の都会らしい場所が存在します。どちらにも緑豊かな自然があり、ほっと一息休める公園がたくさんあるので

す。しかし、今そんな憩いの場所でもあるつくば市の姿というのが、失われかけている気がするのです。それには、いくつかエピソードがあります。小学生の時、ある草原に友達が集密基地を作っていました。それを見に行こうと誘われ楽しみに行ったら、そこはじゃりで敷き詰められた駐車場になって

いました。しかも、あまり使われないうまで。今、思えば、そんな使わない駐車場を作る意味があったのでしょうか。小学生的の好奇心を汚すまで。また、自分が住むマンションの向かいに新しいマンションができたせいで日当たりが悪くなり、その新しいマンションに引っ越した人もいます。それってあまり意味のないことをやっているのでは、という気にもなりませんか。これらのことは、つくば市の様々などころで起きています。それ以前に、つくば市民はこのようなことをどれだけ自分の身として感じていたのでしょうか。

私は、将来学校の先生になって、今述べたようなことを伝えていくのが夢です。私は、教師という仕事がとても重要な役割をもっていると思います。なぜなら、過去も現在も、そして未来も、この街を創りあげる人々は教師によって養われるからです。そんな限らない可能性を秘める子供たちに、「発展」というのは必ずしも企業が建ち並ぶということではなく、先祖たちが今までつくりあげてきたものを大切に守っていくのも、やがては大きな「発展」につながるのではないかと、ということ、将来伝えていきたいと思えます。

そのために、今私ができることは、二つあります。一つ目は、つくばスタイル科に積極的に取り組むことです。まだ職に就けない私にとって、つくば市について調べ、自分の街としっかり向き合い、考えたことを他校にも発信できるのは、とても良い機会です。

二つ目は、地域の行事に積極的に参加することです。八月にある「まつりつくば」は、つくば市で最も盛大に行われるお祭り、私もテスト前にも関わらず、家族や友達と毎年訪

れています。あまり歴史のあるお祭りではありませんが、これからも地域の伝統として守っていけば、やがて立派なつくばの伝統名物となることでしょう。

このように、つくば市には良い所もそうでない所もあります。しかし、私はそれら全部含めて、つくばが大好きです。逆に、改善点があった方がこの先発展できるといえるものです。そして、つくば市から茨城県に「自分の街を愛する気持ち」を発信し、愛する気持ちで包まれた茨城県となってほしいと思います。

大好きないばらきで

笠間市立笠間中学校 二年 長谷川 美波

私の夢は、医療に携わる仕事に就くことです。

そう思い始めたきっかけは、東日本大震災以降に、被災地で働く医師たちの姿をテレビで見たことでした。復興もままならず設備が整わない中で、患者さんの体が少しでも元気になるように、心の傷が少しでも癒えるようにと、笑顔でしんしに向き合う姿に感銘を受けました。同時に、それをただ見つめることしかできない自分の無力さを痛感し、悔しさが募りました。

そんな思いが芽生えてから一年以上が経ち、八月の頭には、県立中央病院で職場体験がありました。普段はあまり見ることのできない病院の裏側を、垣間見ることができました。体験の中では実習の他に、看護師さんをはじめとした病

院で働く方々から、お話を聞くことができました。誰もが口をそろえて、仕事の大変さと、それを上回る喜びややりがいを語ってくれました。その中で私の心に強く残ったのは、「病院で回復する患者さんいれば、命を落としてしまう患者さんもいる。」

という、ある看護師さんの言葉でした。一年間で私は、祖父と祖母の友人を亡くしていました。私の心にまっすぐ突き刺さったその言葉は、大切な人を失う心の痛みを思い出させてくれました。自分では何もできずに誰かが亡くなってしまふのは、もう嫌でした。誰かを救いたい、笑顔にさせてあげられたらと、医療の道に進むことへの思いを、強く確かなものにしてくれた出来事でした。

この一年は私にとつて、死を身近に感じ、当たり前のことのはかなさを教えてくれた、とても大きな年でした。地震の直後、当時通っていた小学校の校庭に積み上げられた、町中から次々と運びこまれてくるがれきの山の大きさを見て、悲しくなりました。何もできないちっぽけな自分の弱さに、憤りを覚えました。どうやって復興に関われれば良いか、どうすれば人を救い笑顔をとり戻すことができるのか、考えぬいてたどり着いた答えは、やはり医療の道に進むことでした。

被害の大きかった東北三県の裏側で、津波や大きなゆれに苦しんだ茨城県。これからの茨城県は、復興を果たし活気をあふれさせていくことが重要だと思えます。筑波市のJAXAや、南部の農業、袋田の滝などを活かした観光事業や、茨城県にしかできない物づくり、技術を更に発達させ、日本の支え、柱となれるようにするべきです。また、県民にとつて

住みよいまちづくりをすることも大切だと思えます。高い技術をもった大きな病院だけでなく、地域に根ざした心がほつとするような小・中規模の病院も、設備の充実や働きやすい環境づくりを整えていくことが大切です。教育にも力を入れ、世界で活躍する人材づくりを進めていけたらいいと思います。少子高齢化が進む現代の日本で、私が生まれ育った大好きな茨城県が、子供からお年寄りの方々まで笑顔で暮らすことのできる良い県になったら嬉しいです。私も茨城県民の一人として、自分の夢を追いかけ実現させたいです。夢が叶ったら、この大好きないばらきで困っている人達を助け、笑顔にできるようにがんばりたいと思っています。

「あたたかい茨城」を目指して

県立並木中等教育学校 三年 市村優佳

私は、未来の茨城は「あたたかい茨城」になって欲しいと思います。「あたたかい」とは、温度や気温の「暖かい」ではありません。「愛情がこまやかである」という意味です。例えば、穏やかで、安心できて、心があたたかくなるような、そんな茨城にしたいと思います。具体的には三つあります。

一つ目に、緑豊かな茨城であって欲しいと思います。茨城県には、緑がたくさんあります。自然に近い森が多く残っているし、北部の山々や筑波山があります。しかし、日本全体では森林面積がどんどん減ってきています。私が住んでいる地域でも、森や畑があった場所に次々に建物が建っています。

す。緑が減るのは、悲しいです。だから、今茨城に残っている緑を、大切に守っていききたいと思います。緑があると、疲れていてもリフレッシュできます。また、森には多くの動物や昆虫が住むので、彼らの生活を守ることができません。沢山の動物たちと共存する、環境に優しい茨城を守っていききたいです。

二つ目に、街に落ちていているゴミを減らしたいと思います。私はよく通学途中に、畑や道端に捨てられている空き缶やペットボトルなどのゴミを見かけます。その度に、不快な気持ちになり、簡単に街を汚してしまう人がいる事に悲しくなります。落ちていているゴミを見ると、とても穏やかな気持ちにはなれません。だから、私は街のゴミを減らす活動を積極的に行いたいと思います。街を掃除する奉仕活動に参加し、「ゴミを捨てないで」などの看板を立てるなど、街をきれいにする工夫をしたいです。

三つ目に、人と人とのつながりが感じられるような県にしたいです。道で近所の人とすれ違う時に「こんにちは。」と言われると、とてもあたたかい気持ちになります。そんな近所の人とのつながりは、これからもずっと大事にしていきたいです。その為には、まず自分からすれ違う人にあいさつしたり、近所の人と話をしたりする事が必要です。そして、公園や広場などの自由に利用できる共有スペースを増やせば、そこで色々な人と仲良くなれると思います。そして自分も、色々な人に親切にできるような人間になりたいと思います。

私が挙げてきたものは、茨城の魅力とは言えないような小さな物かもしれませんが、しかし、そんな「小さな物」こそが、

実は大切な事なのではないかと思えます。あたたかくて、来た人が「もう一度来たい」と思えるような、そんな茨城を、みんなで作っていくことができたらいなと思います。

将来の夢

つくば市立桜中学校 三年 高田果林

人に「将来の夢は。」と聞かれたら、私はまっ先に「人を幸せにできる人になりたい。」と言うと思います。

しかし、人を幸せにできる人といっても人をどうやって幸せにするんだと思うでしょう。

みなさんならどうしますか。

私なら、おいしいお菓子を作って人々を笑顔にさせる、パティシエという職業に就いて人々を幸せにしたいと考えます。

なぜなら、私は昔から親の影響で、ケーキやクッキーを作ったり、食べたりするのが大好きだからです。

私が幼いとき、クッキーを作ってそれを初めて人にあげることになり、嬉しい気持ちでいっぱいかと思ったらそれよりも不安な気持ちでいっぱいでした。

「おいしくなかったらどうしよう。失敗したらどうしよう。」と心臓が「バックンバックン」いっていました。

いざ渡すときになり、「おいしくないと言われたらまた次頑張ろう。」と思って渡しました。

後日、「プルルル」と家の電話が鳴り、「はい。」と言っ

て出たら「もしもし、果林ちゃん。この前のクッキーすつごくおいしかった。よかったら、また作って。」と、以前クッキーをあげた人からお礼の電話がかかってきて、私はそのとき嬉しくて、嬉しくて「人を幸せにするってこんなに楽しい事なのか。」と感じ、パティシエになりたいと思いました。

それから、私は月日が経つにつれて、どんどんお菓子作りへのめり込んでいきました。

そんなある日、ある有名なパティシエの存在を耳にしました。その名前は、鎧塚俊彦さんと言い、スイス、オーストリア、フランス、ベルギーと八年にわたりヨーロッパで活躍し、二〇〇〇年にはINTERSUCという大会で優勝した実績を持つ凄い人です。

だが、そんな鎧塚さんは、網膜中心静脈閉塞症という病気を患っていて左目の視力がほぼ失われているそうです。

私は、これを聞いた時、驚きが隠せませんでした。「左目が見えていないのにどうしてこんな繊細なものが作れるのだろう。」と思いました。

ある時、テレビを見ていたら、鎧塚さんが出演していて、その時に鎧塚さんの「パティシエ人生を変えた言葉」というのをやっていて、私は、それを夢中になって見ました。

鎧塚さんは、現在、五店舗を展開し、中でも六本木ミッドタウン店は連日二時間待ちになるほど大人気。

実は、鎧塚さんがこの画期的な店を成功させた背景には修行時代に料理長から言われた言葉があったそうです。

それは、「一杯五百円のラーメンでも腹一杯になる。でもお客が一万五千円払ってまでフランス料理を食べる意味を考

えろ。」私は、最初これを聞いた時に、何を言ってるか分かりませんでした。「なんでこんなのが人生を変えるんだ。」と疑問でした。

でもこの質問をされた鎧塚さんは「味だけでなく、五臓全てを満足してもらえばいいんだ。」と答えたそうです。

私は、その言葉に衝撃を受けました。

味がおいしいお店なんてどこにもありません。でも、五臓全てを満足させるお店なんてなかなかありません。

私は、この言葉を聞いて人生観が変わりました。ただお菓子を作っておいしいと言ってもらおうのなら、自分じゃない他人にだってできる。でも、それよりも上の「おいしい」という言葉だけじゃ表すことができないようなお菓子を作ることは誰にもできることじゃないと思います。

私は、鎧塚俊彦という人物を知らないまま生きていたら、こんなことを考えることもできなかったし、こんなことを感じることもできなかったと思います。

一番最初に「人を幸せにできる人になりたい。」と言いましたが、人を幸せにする方法はたくさんあります。

でも、その中で私がパティシエというのを選んだのはきつと何かの運命だと思います。自分がお菓子作りが好きだったのもあるし、親がお菓子作りが好きだったのもあると思います。

私は、この運命に感謝して、将来「人を幸せにできる人」になりたいです。いや、「人を幸せにできる人」になります。

この市を見つめて感じたこと

つくばみらい市立谷和原中学校 三年 結速友美

私はこのつくばみらい市が好きです。私はこの市に生まれてからずっと住んでいます。私が小学校三年生の二月まではここはつくばみらい市ではなく、谷和原村という名前でしたが三月に伊奈町と合併し、市になりました。しかし変わったのは名前だけで、他には何一つ変わってしまったりはしていません。家のまわりも、小中学校のまわりも一面田んぼで、夏には清らかな緑、秋には美しい小麦色に染めてくれます。鳥や季節を感じさせる虫の声、広い空と真っ赤に照りつける夕日、にぎやかな子ども達の声。風がのせてくる花の香り。私の市は目と耳と鼻とそして心で自然を感じられます。こんなに素晴らしい所は無いと思わず思ってしまうくらい私はこの市が大好きなのです。でも私はこの市が好きな一番の理由は他にありません。それは「人とのつながり」を感じられるところです。私が学校や友達の家に行く途中、家に帰る途中で、必ずしていることは「あいさつ」です。名前を知らなくともあいさつすることはお互い笑顔になります。それをこの市の人達は知っています。だから義務感でなく自然とできてしまうのです。また私が一番人とのつながりを感じた日が、三月十一日、あの東日本大震災でした。私の市でも五弱という今まで経験したことのない地震でかわらや家の中がめちゃくちゃになってしまいました。でもそんな時近所の人や家に来てくれたり、声をかけてくださってすぐに落ち着くこ

とができました。この市は人の温かい心を感じられます。私もいつかそんな風に感じてもらえるような人になりたいです。

私は今、小学校の先生になりたいと心の底から思っています。勉強を教えたり、子ども達と一緒に遊んだりするのはもちろん、私は温かい心、感じる心を子ども達に伝えたいです。一人でも多くの子ども達に、美しい自然や、人の温かさを感じてもらいたいです。そして、それは当たり前にあるものでなく、築くもの、守り続けるものだということを。私がおぼあちゃんになっても元氣なあいさつが飛びかう市を。どこを見渡しても辺り一面美しい自然でいっぱいな市を。目をとじて、聞こえてくる自然の音も、季節を感じる香りも。どこまでも続く青い空も。今までのように、いや、今まで以上に輝きを増すように、この市を守ってほしいです。しかし、それはこれからの話で、今は私たちがこの市を守らなくてはいいけません。科学が日々進化していく中で自然を残すのは難しいかもしれません。もしかしたら、この市の自然も、気づかないうちに減っていつてしまっているかもしれません。私たち人間は自然なしでは生きていけません。人の温かさは科学では作り出せません。未来のための科学なら、まず第一に、自然を守る技術が必要だと考えます。この日本が、この世界が、このつくばみらい市のような自然や人の温かさを感じられる環境になれば、きっと本当の意味での明るい未来が待っています。高層ビルや工場を悪いと思っっているわけではありません。都会が嫌いなわけでもありません。私は、どんな生活の中でも、自然や人の温かさを忘れなければ、す

てきな世界になると信じています。私たち人間にとっても、自然にとっても。

方言ってあったかい

土浦市立土浦第三中学校 三年 原 はら 彩 あや 夏 か

私の住む茨城県には、特有の方言がある。私が生まれるずっと前から、地域の言葉として方言が使われてきた。

友人との会話。

「どうすべ、宿題終わんねえよ。」

「私なんか、宿題やつてもねえよ。つか多すぎっぺ。」

茨城に生まれ育った私は、何気なく会話しているときでも、無意識に方言を使っていることがある。

茨城の方言は、語尾に「べ」または「へ」「っぺ」などの音がつくことがよく知られている。他の地域の人には、強い口調で、乱暴な話し方に聞こえるらしい。でも、決してそういうわけではないと私は思う。

同じ茨城県の中でも、方言は少しずつ違うようだ。同じように語尾につく言葉でも、私の母が生まれた龍ヶ崎の辺りでは「べ」のかわりに「ほ」がつからしい。

「宿題やったのか、ほ。」

「ほお、はやくしないと遅刻すつと。はやくしろ、ほおつ。」

私が「ほ」をつけて真似してみると、

「なんか彩夏の使い方は違うんだよね。」

と母に言われてしまった。その土地で長く暮らすうちに自然

と使い慣れていくのが方言なのだろう。それに、龍ヶ崎でもよく使う地域とそうでない地域があるらしい。「ほ」はやわらかい音なのに、命令するように言われると、強く、かたく聞こえる。不思議である。

「ほ」の使い方のことを、伯父がこう言っていた。

「『ほ』には五段活用があるんだよ。」

本当に国語の文法で習った動詞の五段活用があるわけではない。でも、ただ一音だけの「ほ」にも、誘う、励ます、急がせる、叱るといった、たくさんの意味を含んでいる。そう考えると、方言も奥が深いなと思った。

地域に住むおじいちゃん、おばあちゃん達が、道ばたで話しているとき、その会話を聞いてみると、方言がたくさん使われている。そんな会話を聞くと、なぜか心があたたかくなる。「自分は茨城に生まれただ。ここで暮らしているんだ。」と改めて思う。

東北の民宿に泊まりに行ったとき、茨城に似た方言を聞いた。東北は寒い地域だから、なるべく口を動かさない発音に方言が進化したという話を聞く。

その中で、一番驚いた方言がある。

「けえ、ほ。」

この方言は、標準語に訳すと、「これ、食べな。」という意味になるそう。食べ物と相手に勧めるときに用いるらしい。短い音なのに、そう言われると、目の前のごちそうについて手が出る、そんな言葉だと感じた。

方言のあたたかさとは、安心感だと思う。そして、茨城県に生まれ育ったからこそ芽生えた、茨城県への愛着を、私は

方言に感じているのかなと思う。

今は東京の言葉が標準語として普及している。方言は標準語の普及によって消えつつある。標準語の普及は、みんなに共通の言葉で理解されるという利点がある。その一方で、「方言は格好悪い。」「田舎くさくて使いたくない。」と敬遠されていくことにつながってしまったのではないだろうか。方言から感じる田舎っぽさに恥じらひを感じ、方言を伝える人が、少しずつ減ってきている。

私は、この茨城が好きだ。地域の言葉、方言も好きだ。緑あふれる筑波山、豊かな水田、広く大きな霞ヶ浦、そして、その雄大な自然の中で生まれた方言という文化。どれもかけがえのない大切なものではないだろうか。

私は、この地域で生まれたあつたかい方言を、これからも大切にしていきたい。

私の描いた将来の夢

県立土浦特別支援学校 一年 小林 まどか

私の将来の夢は、体の不自由な人のお手伝いをする福祉の仕事につく事です。

私が福祉の仕事を目指すようになったのは、私のおばあちゃんがきっかけです。おばあちゃんは、糖尿病で体が不自由だったので、福祉施設にお世話になっていました。私も何度か手伝いに行っていました。施設の方と一緒に頑張って手伝いをしていくうちに、福祉という仕事に興味をもち、魅力を

感じました。それは、おばあちゃんがとても喜んだ顔をしてくれるからです。喜んでくれるおばあちゃんの顔を見ると私もうれしくなってしまう。それから福祉について、少しでも理解しようと考えるようになってきました。

でも、おばあちゃんは施設でいきなり亡くなってしまいました。最後までおばあちゃんのそばにいて、尽くしてあげられなかった事を今になって後悔しています。突然の事で悲しかったけれど、その悔しさを胸に福祉の勉強を自分なりに頑張ってみようと思います。今の自分にはなれるかどうか不安ですが何事にも負けずに頑張りたいです。

中学校の時は、体調もなかなかすぐれなくてあまり学校に登校する事ができませんでした。高等部に入學してからは、体調面に気をつけて学校を休まず勉強に励みたい。特に、福祉の勉強を考えています。優しい態度、言葉遣いなど、お年寄りがとても喜んでくれるからです。おばあちゃんやおじいちゃんとお話をして過ごす事は大変な事だけれど、喜ぶ顔を見ると「楽しい事なんだな。」と思えました。私の周りには、おばあちゃんやおじいちゃんがたくさんいます。土浦市にも、茨城県にもたくさんいます。そんなおばあちゃんたちの喜ぶ仕事が見たいと思います。

私が小学校のころは保育士とか花屋さんとかそういう仕事についてみたいと思っていました。しかし今は、新しい夢や目標を見つけてまっすぐに自分の夢を追いかけられるのがこんなに素晴らしい事なんだなって気づき、毎日学校で勉強する事が楽しくなってきました。夢を見つけてすごい事だなど改めて思いました。

今まで夢なんて曖昧で、「どうでもいいや。」なんて思っていたけれど、そうではなくとも毎日が楽しく思えるほど自分がかわつてきた気がします。自分を少しずつ変えてくれる夢を諦めず、これからも突き進んでいきたいです。高等部で学んだように礼儀や態度、言葉遣いなどをもっと気をつけて、社会で生きていけるような立派な人間になりたいです。

先生のアドバイスや注意などをよく聞いて、向上心を忘れず素直な心を持ち、私生活や学校生活などで活かしていきたいです。私は、すぐにあきらめてしまう性格なので、それを直すための努力をし、これからにつなげたいと思います。挫折や落ち込み、時には逃げたくなる時もあるかもしれないけれど、そんな事にも負けない強い自分になりたいです。強い自分になる事は、どうやってなれるか今考えてもさっぱり分からないけれど、こつこつ自分を変えていかなければいけないと思っています。自分の事を自分が一番知らないと思いたいのので、これからは何事にも本気で取り組んでまじめに授業に励みたいです。

今授業では、みんなと協力することについて話し合いをもち、仲良く活動を進めています。交友関係を崩さずにマイペースで勉強ができたら幸せです。家庭内事情が大変だったとしても、産んで育ててくれた親に対して優しさで返してあげたいです。小学生のころは、親が嫌いと思っていたけれど、高等部生になってみて親のありがたみや親が私たちの為にしてきた苦労が分かってきた気がします。今まで苦労ばかりかけていたから、それ以上に私は親への感謝の気持ちを持ち、笑顔が見られるように「一日一日を大切に過ごしてい

なければ。」といます。自分は、まだまだ未熟だけれど何も分かっていない子どもだけれど、これからもっといっぱい学んで、立派な大人になりたいです。

茨城の魅力

県立下妻第一高等学校 二年 原 はら 品 しな 佳那子 かなこ

あなたは茨城県を、どのような場所であると考えていますか。多くの人が「何もない場所」「さつぷうけいな場所」と考えているかもしれませんが、テレビを視聴していても、茨城県は魅力のある都道府県のランキングなどでも、ワースト三位に入るほど、魅力の少ない場所と思われるがちです。茨城県には東京タワーや東京スカイツリーなどの面白い建物も少ないけれど、京都の町並みや沖縄の首里城などのような歴史的な建物も少ないので、結果的に訪れるのに良い場所が無くて、「何もない」と全国的に思われてしまっているのだと思います。

全国的にこのように思われている茨城県ですが、自然が豊かであることは茨城県の魅力の一つだと私は思います。

例えば、茨城には日本で滋賀県の琵琶湖の次に面積が大きいと言われている、とても大きな湖、霞ヶ浦があります。現在、アオコの問題もあったので、水質はあまり良いものとは言えません。私が小学生のころに、霞ヶ浦の湖上セミナーに参加させていたでいて、霞ヶ浦を船でまわった時、「霞ヶ浦って汚い。」と正直思ってしまう程、透度計で透度を計っても、

水質のバック調査をしても、キレイと断言できるような結果は出ませんでした。ですが、霞ヶ浦では冬にワカサギ釣りができるなど、たくさんの種類ではないけれど魚が泳いでいます。かつては今よりもっと透きとおり、キレイな水の中でしたか生きられない魚もたくさん泳いでいたこともセミナーで話を聞いて知りました。人々の生活の影響を受けて霞ヶ浦の水が昔のようなキレイさを失っていったのかもしれないと考えた時は心が傷みましたが、これから水質がよくなり魚がたくさん湖の中で生きるようになって湖の中の生態系が良くなれば現代の私たちにはまだ分からない霞ヶ浦本来の美しさを取り戻せるのではないかと、またそのために自分には何ができるのか考えていかなければならないと思いました。

また、茨城県には筑波山という山があります。富士山と比較してしまうと、それほど大きい山とは言えませんが、四季に合った自然の風景が美しく、登山道が整備されていて、登りやすい山です。私は筑波山に一、二回くらいしか登ったことはありませんが、登りきった後、「つかれたなあ。」と思いつながらも見えた周りの景色が今までに見たことがないのでないかと思うくらいに美しく、頑張つてあきらめずに登りきつて良かったなと実感させられました。そんな美しい筑波山ですが、ゴミが落ちていたりという話も耳にするので、せっかく登りに来ていただいたのにゴミを捨てるのかと、山を管理してくださる方たちの気持ちを考えると悲しくなります。筑波山に気持ちよくいろんな人に登りに来ていただきたく思っていたので、ゴミ拾いのボランティアなどに積極的に参加していきたいと改めて感じました。

最近ではつくばエクスプレスや茨城空港ができたように交通の便が良くなったり、つくば学園都市によって、まだ一部ではありますが、茨城も少しずつ、都会的で便利になってきているので、このまま豊かな自然を残しつつ、もっといろんな人に親しんでもらえるような茨城になるように発展していけば良いと思います。

今回私が知っていて取り上げた茨城県の魅力は、ほんの一部にすぎません。まだまだ、発展に向けての課題はたくさんあり、また、地元の人たちにもより良い生活を、茨城で営めるように考えていかなければならない問題も多いと思います。が、地域の人たちが助け合い、協力し合っていけば、どんどん茨城は発展し、人間性も環境でも豊かな茨城になっていくと思います。

今回のことで少しでも全国の人たちが、茨城県のことを「何もなし」「さつぷうけい」と思うことが減れば幸いです。

今後の茨城のために私ができることは少ないかもしれませんが、今できることを自分で考えて見つけて、少しずつ行動に起こせるようにしていきたいです。これからの一人一人の活動で誰にでも住みよい茨城県として成長して欲しいと思います。

おばあちゃん

県立下妻第一高等学校 二年 塚^{つか}原^{はら}来^{くる}見^み

私は、小さい頃からおばあちゃんが大好きです。おばあちゃん、茨城生まれ茨城育ちなので、茨城のいろんな事を知っています。茨城の人の優しさや自然を大切に作る心、他人を思いやる気持ちなど、茨城の人のいいところをたくさん教えてくれます。

今まで一番印象に残っているおばあちゃんの言葉、それは、「茨城なら大丈夫。私は、昔から茨城の力を信じてるから。」という言葉です。おばあちゃんがこの言葉を言ったのは、昨年の四月。そう、あの震災の直後です。茨城県も大きな被害を受けました。また、福島原発事故の影響で、茨城県の農作物は、多くの人に非難されてしまったのです。そして、私のおばあちゃんも農業をしているので当然以前と同じような収入も得られなくなり、大量の農作物だけが残りまじした。そんな時、おばあちゃんは、悩んでいる様子もなく、あの言葉を言ったのです。

私はとても驚きました。一番ショックを受けているのはおばあちゃんだと思っていたからです。その時に私は、こう思いました。「おばあちゃんみたいに茨城県の力を知って、信じたい。」

私は来年、高校三年生になります。最近、進路について真剣に考え始めました。決まっていることは、生まれ育ったこの茨城県から離れるということです。正直すでに不安な気持ち

ちでいっぱいですが、私は心の中である目標を立てました。「他県のたくさんの人たちに、茨城のいいところを広める」ということです。そしてもうひとつ。「いろんな県の人と話し、いいところを知る」ということです。そして、それをおばあちゃんに教えられたらいいなと思っています。

私が大人になって、おばあちゃんになる頃、日本はどうなっているのでしょうか。茨城はどうなっているのでしょうか。少子高齢化の問題や環境問題は解決・改善されているでしょうか。それは、私たち次第なのです。私は、孫に日本、そして茨城のいいところをたくさん教えてあげたいのです。

今、私は大好きな茨城のために何ができるのか。「どんなに小さな事でも行動を起こすことに意味があるんだよ。愛を忘れずに未来を守るんだよ。」と、おばあちゃんに言われたことがあります。そこで、私は考えました。考えた結果、「おばあちゃんに教わった茨城の良さを多くの人に伝え、知ってもらう。」と思いました。今のような自然あふれた茨城を何年後、何十年後、何百年後の未来に残すために、目の前にあるであろう自分にできること、自分にしかできないことをたくさん見つけて、実行し、そしてそれを周りの多くの人に伝える。これが私の出した答えです。

この茨城の澄んだ空気のように、日本、そして世界全体をキレイにするために、未来のことを考えて、これからも大好きな茨城を大切にしていきたいと思っています。

人とのつながりで生まれる未来

県立水戸第三高等学校 二年 大^{おお}原^{はら}彩^{あや}香^か

あの三月十一日の大震災の時、私は高校への合格も決まり、友人と羽をのばしに出かけていました。家からもだいたい離れていたため、家に一人でいた家族を心配して初めて泣いたあの時、震災後、水がなく弟と給水所に行ったあの数日間の日々は、昨日のことに覚えていきます。また、あの時ほど近所の方々と助け合ったことはないと思います。

茨城県は、放射能漏れのあった福島県と隣り合っていたため被害は大きかったと思います。放射性セシウムが基準値より多く含まれてしまったという農作物は出荷が出来なかったのですが、スーパーには県外物や国外物が多く並んでいました。基準値をオーバーしていなくても、人に不安の種を一度まいてしまつたら、なかなか消すことは出来ないのです。県内の農作物がスーパーに出回ってもなかなか手をのばせませんでした。しかし、私の家では、私が家族に話したあることがきっかけで県内の農作物を進んで買い始めました。

いつものように学校帰りの道を通っていると、ある畑で一生懸命畑の土の入れ替えをしているおばあさんがいました。手も服も泥だらけになっていました。私がおばあさんに話しかけてみると、放射能のことがあり野菜は出荷しても売れない。でも、わしはくじけん。東北の人々はもつと苦労してるんだ。と、私につぶやき作業に戻っていききました。実は、私はこのおばあさんが、前にも何度か土を入れ替えている姿を

見かけたことがありました。「くじけずに頑張る人がいる。」と心から感じて私は、県内の野菜や果物を買ってもらおうと決めたのです。

今では、放射能のことは改善されて、農家の方々も変わらず前のような生活が出来ていると思います。道で出会ったおばあさんのように「何事にも前向きに、くじけずに頑張る」そんな人々が茨城県内に増えれば、茨城は何事にも強くて、復興・立ち直りの早い県となると思います。

そして、もう一つ語りたことがあります。私の両親は共働きだったので家族全員が揃うことはなかなかなく、一人であることの多い日々が続いた幼少時代でした。そんなある年の私の四、五歳の誕生日の日に、久しぶりに家族揃ってケーキを買いに行きました。その時のお店のパティシエさんの輝く笑顔や、そのケーキのおいしさ、そして何より家族でいられる嬉しさに私はそれまで一番の笑顔になりました。それを見て、普段あまり笑わなかった父と母が笑ってくれたのです。その時、私はこの職人さんのように人を笑顔にさせ、みんなに幸せを与えたい、と思います、その頃からパティシエになることを夢見ています。そのため、家政科に通いそして、洋菓子屋さんでバイトをしています。そのバイト先のあるシヨクラティエの方が、震災後にすごいことをしました。それは……。

“自分の作ったお菓子を配った”ことです。私はそれを聞いて、やっぱりすごい人だと、心の底から思いました。自分も震災の被害者であるのにもかかわらず、他に困っている人達のことを考えて、「お菓子で人を救いたい。」と行動できる

彼は、私の目標になりました。

私は、あの震災をきっかけに、自分の町や自分の県についてよく知ることが出来ましたし、また、地域の方々とのつながり、現状をも理解することが出来ました。多分、あの震災で茨城が受けた被害ははかり知れないものとは思いますが。しかし、被害と同時に県民一人一人がそれから学んだものもはかり知れないと私は思います。家族とのつながりや近所の方々とのつながりが改めて感じることで、そこから大切にしようとして未来につながる気持ちが生まれたりしたことでしょうし、また、誰かを思う気持ちが強くなり、心の優しい人が増えたと思います。さきほど話した洋菓子職人さんのよ

うに、“何か”で人を救おう、そして茨城を復興させようとした方々がたくさんいたのではないかと思います。私は、高校生なので他人のために何が出来るとか、茨城のためには何をすればいいのだろうと考えるのはつきりとした答えはまだ見つかりませんでした。でも、これから大人へと変わる中ではつきりとした答えを見つけて、一人の人間として、茨城県民として、夢を叶え一人の職人として、人々にそして、この大好きな茨城に、明るくて幸せに満ちあふれ、笑顔という名の花がたくさん咲き誇るすばらしい未来を築き上げられるように、これからの日々を、精一杯仲間と茨城とともに歩み続けていきたいと思っています。

